CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Kyoto University Research Information Repository
KURENAI 紅
Kyoto University Research Information Repository
KYOTO UNIVERSITY

Title	日本占領下のフィリピン・レイテ島における対日協力と対日抵抗をめぐる政治抗争
Author(s)	荒, 哲
Citation	東南アジア研究 (2013), 51(1): 70-108
Issue Date	2013-07-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/179429
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

Kyoto University

東南アジア研究　51巻1号　2013年7月

日本占領下のフィリピン・レイテ島における対日協力と対日抵抗をめぐる政治抗争

荒　　哲*

Political Feuds over Collaboration and Resistance during the Japanese Occupation of Leyte, Philippines

Ara Satoshi*

Abstract

Most of the literatures on the Japanese occupation of the Philippines in the local setting tend to focus on the "achievements" of anti-Japanese guerrilla movements. Meanwhile, except for some academic works conducted by the American historian, Alfred McCoy, other aspects of the Japanese occupation in rural areas of the country—such as political strife or factionalism among the local elites—have been avoided in discussions since it has been tabooed since the end of the Asia-Pacific War. Taking the academic gap into consideration, this article examines the memory of the war among local residents in certain area of the Philippines, Leyte. Interviews were conducted in the province of Leyte, focusing on political violence or atrocities in three towns—Ormoc, Abuyog, and La Paz. This article also clarifies that war atrocities in the province were attributed not only to the Japanese occupation policy but also to the political factionalism among the local elites, regardless of their political stance toward the Japanese occupying forces. Their political ambition became quite fierce during the Japanese occupation period, leading to bloody outcomes in each municipality. After the war, the elites' violence or atrocities were "absolved" by local residents so they could establish their political and economic hegemony over the province.

Keywords: Philippine local history, Japanese occupation, collaboration, political feuds, political violence, atrocities, memory of war

キーワード：フィリピン地方史，日本占領期，対日協力，政治抗争，政治暴力，残虐行為，戦争の記憶

* 福島大学非常勤講師；Fukushima University, 1 Kanayagawa, Fukushima City, Fukushima 960-1248, Japan
e-mail: p510@ipc.fukushima-u.ac.jp

は じ め に

フィリピン史研究の中の日本占領期における残虐行為や暴力については，その原因や過程を追究した研究が現在に至っても少ない状況が続いている。本稿は，フィリピン史研究の分野においてあまり多くが論じられてこなかった日本占領下のフィリピンの地方における[1] 抗日ゲリラ，並びに占領地のエリートらが関与した政治抗争と，それが原因で発生した政治的暴力や残虐行為について考察する。

戦時下という状況の中で残虐行為や暴力に関わる行為体としては，駐留日本軍，抗日ゲリラ，対日協力者，一般住民等をあげることができよう。従来の研究においては，これら行為体の中で抗日ゲリラ活動が分析の主軸をなす傾向があった。[2] 日本占領下のフィリピンにおける抗日ゲリラ活動の研究は，元抗日ゲリラのリーダーであったフィリピン人やアメリカ人軍事専門家たちによって1950年代から本格化するが，これら研究の全体的な焦点は，ゲリラの直面した困難や功績に置かれていた。80年代以降もフィリピン人歴史家を中心にこのような点に焦点を当てた抗日ゲリラについての研究[3] は続いていく［寺見 1994: 102］。日本占領時代がフィリピンの住民にとって暗黒で過酷な時代であったことや戦後の冷戦思考の下では，抗日ゲリラに関する研究がこうした傾向を持つのは自然であったと思われる。その一方で多くのフィリピン人歴史家たちは，日本占領下の対日協力や抗日ゲリラ活動等がもたらした様々な負の歴史を語り継ぐことをおろそかにした。こうしたフィリピン人による日本占領期研究のギャップをアメリカ人研究者が補っていった。

その中でアメリカのフィリピン史家アルフレッド・マッコイ（Alfred McCoy）は，1980年に発表した論考「他の手段による政治」（A Politics by Other Means）で，スペイン・アメリカ植民期の中で形成された派閥政治が日本占領期に激化し，それが原因で戦後のフィリピン民主政治の「倦怠化」を招いたと論じていた［McCoy 1980: 193］。ここでは，戦後のフィリピン政治で頻発している政治暴力の原因が，日本占領期において地方で頻発した暴力的な政治抗争に帰せられることを示唆している。

マッコイのこの議論は，いみじくもスタインバーグ（David Steinberg）が1967年に刊行した

1) 日本占領下のフィリピンの地方に関する詳細な研究はそれほど多くない。1940年代後半から1950年代にかけてはPedrola［1949］，Lear［1951; 1952］などがある。その他後述するマッコイによる研究McCoy［1980］に触発されたCaluen［1984］がある。90年代に入り，ホフィレーニャによるネグロス島の抗日ゲリラに関する研究やコルテスによるパンガシナンの地方史のモノグラフが発表されHofileña［1990］，Cortes［1990］，また川島［1996; Kawashima 1999］が日本占領下のミンダナオ島の状況について論考を発表している。
2) 例えば，Agoncillo［1965: 645–777］，Baclagon［1952; 1962; 1966］，Doromal［1952］，Haggerty［1964］，Harkins［1955］，Mojica［1965］，Volckmann［1954］などがある。また未刊行のPobre［1962］もある。
3) 例えば，Hofileña［1990］がある。

著書『第二次世界大戦におけるフィリピンの対日協力』（*Philippine Collaboration in World War II*）［Steinberg 1967］において論じた，フィリピンエリートを中心とする寡頭政治体制の戦後における継続とその政治的変化を批判しつつ展開されたものである。この中でマッコイは，それまでフィリピンの日本占領期研究であまり分析されることのなかった地方（フィリピン中部のパナイ島）における現地エリート同士の政治抗争を手掛かりに，州レベルの地方政治で展開された派閥政治の特色を浮き彫りにした。そして，ベンダ［Benda 1958］やスタインバーグらが主張した日本占領期が東南アジア社会に与えた衝撃がもたらす「変化説」に対抗し，フィリピンにおいてはその社会的変化を否定する，いわゆる「連続説」を強調した。

このマッコイが主張したフィリピン政治史における特徴は，フィリピンのごく一部の地域を除き，[4] フィリピンのどの地方においてもある程度適用できるものと考えられる。問題は，マッコイがパナイ島のイロイロ州を中心とする州レベルでの派閥政治の特色に議論をほぼ限定している点にある。日本占領下という特殊な状況の中で戦前からのエリート政治家が駐留日本軍に対してどのような態度をとるに至ったのかは，州（province）を構成する町（municipality）や村（barrio）などにおける，それぞれ違った政治状況や社会状況によって左右されていたと思われる。また，こうした現地エリートの駐留日本軍に対する対応は，日本軍当局が行った様々な占領政策や分断支配によっても変化したと考えられ，そこでは単にエリート以外の一般住民を巻き込んだ対日協力や対日抵抗の相克があったと考えられる。こうした点を考慮すれば，州レベルの派閥政治は町レベルの派閥政治に必ずしも反映するとは限らなかったと考えられよう。そして，そこで発生した政治暴力の現状もマッコイが論じた州レベルの派閥政治に基づくような単純な図式で展開されたものとは違った様相を呈していた可能性がある。

そこで本稿では，フィリピン中部に位置するレイテ（Leyte）州[5] を構成している町々の中で三つの町（オルモック Ormoc，アブヨグ Abuyog，ラパス La Paz）をケーススタディーとして，それらの町において展開された日本占領下の対日協力や対日抵抗がもたらした様々な政治抗争を検討する。分析の対象とするのは前述した三つの行為体，すなわち駐留日本軍，対日協力者，並びに対日抵抗に従事した現地エリート（町長やゲリラリーダー）の間の相互関係がもたらした様々な政治暴力である。これを手掛かりに，従来までのフィリピン史研究で分析されることの少なかった，町レベルにまで下りた，地方における日本占領期の一側面を明らかにする。ところでマッコイは，1993年に刊行した『家族間の無秩序』（*An Anarchy of Families*）という著

4) カークフリート［Kerkvliet 1977］が主張するような戦前からのルソン島中部で展開されたフクバラハップ（Hukbalahap）による共産主義運動がもたらした政治変化がある。

5) 本論の表題である「レイテ島」とは，フィリピン・コモンウェルス期からの行政区分に基づく「レイテ州」（Province of Leyte）によって包括された領域の一部である。実際，「レイテ州」にはレイテ島の他，ビリラン（Biliran）島，マリピピ（Maripipi）島，パナオン（Panaon）島などの島々も含まれていた。CIC Area Study No. 3, Leyte Province, USAFFE-APO 501, 14 February 1945. Box 017, Entry 134A, RG319, National Archives and Record Administration 2 (NARA2), College Park, Maryland, USA.

書の中で，フィリピン人エリート自身によって刊行された歴史書や伝記がエリートの政治行動を「聖人化」してきたことを痛烈に批判し，フィリピン史の「大御所たち」でさえも地方のエリートの存在を歴史研究にあまり考慮しておらず，加えて彼らの政治行動がもたらした負の側面を無視してきたと指摘している。加えてマッコイはこの著書において，地方のエリートが関わった様々な時代における負の記憶さえもが「免罪」された後に消滅させられている点を指摘している［McCoy 1993: 2, 4］。またレイテの地方史家ボリナガ（Rolando Borrinaga）は，レイテのようなフィリピンの一地方においても，一般レイテ住民の脳裏の中に残存している戦争の記憶はごく一般的な歴史的事実（バタアン死の行進，コレヒドール戦，マッカーサーによるレイテ上陸，日本兵による残虐行為，など）のみである，と指摘している［R. Borrinaga 1995］。こうした背景には，レイテエリートらによる意図的な抗日ゲリラ賞賛や過去の政治抗争の歴史などをタブー視する地域の社会的環境が影響していると考えられよう。[6] このような点を反省し，レイテにおける日本占領期を従来と違った視点でより冷静に，そしてより客観的に分析する研究が求められるのである。[7]

レイテの町レベルのエリートたちは駐留日本軍に対してどのような対応をとるに至ったのか。また，戦前からの派閥抗争は日本占領によってどのような展開を見せ，占領政策がもたらした様々な残虐行為とどのような関連をみせたのか。そして戦後のレイテ政治はどのような様相を呈したのか。この研究は，こうした疑問に迫るものである。[8]

本格的な議論の前に，レイテ島の地理的特色，そして戦前からのレイテにおけるエリートの政治的特色を概観してみよう。

---

6) 筆者は，1995年8月に放送されたNHK番組「死者たちの声，大岡昇平『レイテ戦記』」の制作スタッフに同行して複数の元抗日ゲリラのメンバーと面談したことがあるが，その多くが自分たちのゲリラ組織内部における政治的問題や仲間内の抗争について何も語らなかった。

7) 近年，レイテ・タクロバン在住の地方史家でフィリピン大学パロ校の看護学部において総合教育の歴史学で教鞭を執るロランド・ボリナガ教授が数々のレイテ・サマール史に関するモノグラフを発表し続けている［R. Borrinaga 2008］。それ以前では，タクロバン市にかつて存在したデヴァイン大学（Devine University）（現在休校中）が発刊していた地方史研究誌 *Leyte-Samar Studies* で数多くのレイテ・サマール史関係の論考が発表されていた。しかしながら，ボリナガも認めているように，スペイン期，アメリカ期，日本占領期三つの植民地史の中でも日本占領期についての研究実績がとりわけ少なく［R. Borrinaga 2006; 2008］，アメリカの歴史家エルメール・レア（Elmer Lear）［Lear 1951; 1952; 1961; 1978a; 1978b; 1978c; 1978d］による一連のレイテ日本占領史研究以外に目立った研究が無いのが現状である。そのレアが発表した研究は，日本占領時代のゲリラ社会を扱った内容が大部分であり，依拠された資料の多くが著者レア自身の所属していた米軍関係文書もしくはゲリラ活動に関わった当事者（一部の対日協力関係者も含む）へのインタビューで占められている。一方で，占領駐留を担当していた日本軍側の資料が全く用いられていない［Lear 1951］。このためレアの研究では，日本占領全体をレイテ・サマール史全体及び駐留日本軍による戦略から検証するという視座に欠けており，むしろ当時のレイテ島に存在していた様々な抗日ゲリラ諸組織についての緻密な記述に終始している。こうしたレアによる研究上のギャップを補完する研究が筆者の研究［Ara 2011; 2012］やジョージ・ボリナガ（George Borrinaga）［G. Borrinaga 2010］によって発表されている。

8) 本稿では，政治暴力等のもう一方の行為体である「一般住民」の関与について触れていない。これについてはいずれ別稿で論じていきたい。

I　レイテにおける日本占領の開始

レイテ島は，フィリピンで8番目に大きい島で，日本軍が侵攻する2年前の統計によると同島の面積は約4,000平方キロメートルであり，人口は約91万人であった［Philippines, Commission of the Census 1940］。農業は米，トウモロコシのような基幹作物よりはむしろアメリカ植民地時代から奨励されたサトウキビ，タバコ，ヤシのような換金作物の栽培が盛んであった。そのため他のビサヤ諸島（例えばセブ（Cebu）島やパナイ（Panay）島）での農業と比較しても住民の生活基盤となる主食の確保が厳しい状況があった。拙稿でも述べられているように，1942年5月以降に開始されるレイテにおける日本軍政の第一の課題として駐留日本軍のための食糧調達の問題があった［荒 2006; Ara 2008］。当時，フィリピン占領を担当した日本第14軍は，コレヒドール戦以降の兵力配置の重点をルソン島中心に据えており，レイテ島について言えば1942年5月以降の配置部隊は，侵攻を担当した永野支隊の一部と，その後マニラから同年5月下旬頃に増援された陸軍第16師団からの松永部隊のみがレイテ島全体の警備を担当した。

これは全体規模として1,000人程の駐留部隊であり，実際問題，太平洋戦争が始まったあたりからすでにレイテでも活発化していた抗日ゲリラ組織に十分対抗できる規模ではなかった。それでも永野支隊並びに松永部隊は侵攻後直ちにタクロバン（Tacloban）に進駐し，いくつかの公共の建造物を強制接収し，日本軍政を開始させた。日本軍政の基本方針は，建前として旧コモンウェルス（Commonwealth）体制を維持しながら国内の治安維持にあたることであったため，レイテの民政も侵攻以前のレイテ州政治体制をそのまま継続させながら行われた。一方，タクロバン近郊の町々，例えばパロ（Palo），ドゥラグ（Dulag）などにも中尉あるいは少尉クラスの将校を司令官とする中隊あるいは小隊規模の進駐部隊を駐留させ，また西部の主要都市の一つオルモックにも小規模の小隊を駐留させた。こうしたレイテ島内の遠隔地における軍政では，駐留司令官が各町々の町長等と個人的に接触し，その司令官が各町長を任命する形で軍政を施行させた。ただレイテ島内のほぼ9割近い地域が抗日ゲリラ組織の支配下にあったとされ，形式上日本軍に協力すると見せかけ，こうしたゲリラ組織と秘密裏に連絡を取っていた町長も多かった。そのため，占領当初，日本軍が直接接触できなかった遠隔地の町長も多く，実際，戦況が押し迫った1944年になって初めて日本軍政が開始された町（特にレイテ南部地方）も多数存在した。[9)]

9) 米軍の諜報部隊CIC（Counterintelligence Corps）が1945年に作成した報告書によると，1944年現在，完全に日本軍によって占領されていた町は全部で11に過ぎなかった。それらは，アランアラン（Alang-alang），バルゴ（Barugo），ブラウエン（Burauen），カリガラ（Carigara），ドゥラグ，ハロ（Jaro），オルモック，パロ，タクロバン，タナウアン（Tanauan），トロサ（Tolosa）である。ちなみに当時レイテ島には47の町があった。前掲 CIC Area Study No. 3, Leyte Province.

それでは日本占領直前までレイテ島にはどのような政治体制が存在し，その一方でどのようなゲリラ組織があったのか，そしてどのような経過で対日協力あるいは対日抵抗が始まったのかについて考察してみよう。

II　コモンウェルス期までのレイテ州における政治体制

レイテ島は，スペインによる植民地支配が開始された16世紀後半より早くから徹底したカトリック教化が進められ，隣のセブ島における植民地支配と同様，ジェズイット教団（Jesuit）による宗教支配が行われた［Tantuico 1964: 121–125］。スペイン植民地時代，南部ミンダナオ地方から幾度かのイスラム教勢力，いわゆるモロ族によるレイテ侵攻が行われた時期もあったが，その影響は小さく，そのためレイテ島人口の9割以上がカトリック信者である。スペイン植民地期から19世紀末に始まった対スペイン革命期を経て，レイテ島も20世紀初頭から開始されたアメリカ植民支配のもとに置かれた。「プラハン運動」（Pulahans Movement）のような頑なな反米運動も展開されたが［G. Borrinaga 2010］，1906年に現地エリートを代表するハイメ・デヴェイラ（Jaime de Veyra）が初のレイテ州知事に選出されると，治安は比較的安定へと向った。その後デヴェイラの政治体制を受け継ぐホセ・ヴェローソ（Jose Veloso）が1920年代よりレイテ政治に絶大な権力を保持するようになった［Tantuico 1964: 167–170］。

ヴェローソはその後，上院と下院議員の職を行き来しながら，1935年のコモンウェルス政府下の第一回国民議会におけるレイテ州政府代表（Assemblyman）にも選ばれた［Quetschenback 1977: 1–2］。そのヴェローソは，同町付近の有力な大地主であり，その絶大な経済力を背景に，他の有力な地主階級に属していたイナヘ（Enage）家やカバホグ（Cabahug）家，トーレス（Torres）家，サラサール（Salazar）家とも親族関係を結び，確固たる州政治家としての地位を築いていったのである。[10] 特にトーレス家，サラサール両家とホセ・ヴェローソとの結びつきは1940年代のレイテ州政治の特色を物語るものであった。またマニラのケソン（Manuel Quezon）率いるナショナリスタ（Nacionalista）党とも連携を強化しながらヴェローソ・サラサール体制が次第にレイテに確立されていった。

当時トーレス家の有力政治家ベルナルド・トーレス（Bernardo Torres）は，1939年，日本軍がフィリピンに侵攻する2年前にレイテ州政府委員会（Leyte Provincial Board）のメンバーへの立候補指名をヴェローソから受けることになる。ヴェローソはまた，サマール島において絶大な政治力，経済力を有していたサラサール家と，自分の妹の一人をパストール・サラサール（Pastor Salazar）と婚姻させることにより，その緊密な関係を結んだ。そのパストール・サラ

10) ホセ・ヴェローソの孫娘へのインタビュー。1996年3月1日。（フィリピン，ケソン市マギンハワ通りにて）

サールは1939年，トーレスと共に州政府委員に選出された［Quetschenback 1977: 1–2］。こうしてコモンウェルス期以降から日本占領時代に至るまで，レイテではいわゆるヴェローソ・サラサール派が政治的実権を掌握し，1940年12月に行われたレイテ各町の町長選挙でも当選したほとんどの候補者がこのヴェローソ・サラサール派に属していた，あるいはほとんど強制的にこの派閥に組み入れられていったという。[11)]

このような政治的状況の下で日本軍のレイテ侵攻は行われた。レイテ駐留日本軍は作戦として，こうしたヴェローソを中心とする現地の政治エリート集団に接近し対日協力を求めたと思われる。日本軍も今述べたヴェローソ・サラサール派によってレイテ政治が掌握されている実態を認識していた。レイテ占領が開始されてから1年半ほど過ぎた日本陸軍第16師団の文書（1943年12月）によれば，「ナショナリスタ党はホセ・ベロソ（ママ）及びフランシスコ・イネヘに依って率いられたる（党は夫々ベロシスタ・イナヒスタと称す）に分離し」と記録され，ヴェローソ派が60パーセント，イナヘ派が38パーセント，その他2パーセント，であるとしていた。[12)]

侵攻当時，レイテ州知事は，ラファエル・マルティネス（Rafael Martinez）であったが，日本軍のレイテ侵攻直後にヴェローソの強い推薦のもとベルナルド・トーレスが日本軍によって州知事に任命された。ヴェローソは，日本軍の侵攻当初，抗日戦線の設立を検討していたといわれるが，サラサールと協議の上，抗日運動によって「レイテ住民が苦難を強いられるのは大変に酷である」との結論に達し，対日協力を表明したという。[13)] このため，ヴェローソ，トーレス，サラサールの3人が先頭に立ちながら，降伏を拒否し山岳部に身を隠し抗日ゲリラ集団に身を置いていた元ユサフェゲリラなど（詳細は次章）に対する宣撫活動を展開することになった。それでは次にこうした抗日ゲリラ集団の状況について簡単に見ていこう。

III　レイテ島における抗日ゲリラの状況

日本軍がフィリピンに侵攻を開始した翌月の1942年1月当時，レイテは未だコモンウェルス政府の下にあった。日本軍は，マニラ近郊のバタアン半島並びにコレヒドール島において，それぞれ極東米陸軍（United States Army Forces in the Far East, USAFFE）と米比合同軍（United

11) ホセ・ヴェローソの孫娘へのインタビュー。
12)「垣，サレ作命甲第五号別冊」『第十六師団（垣）情報記録綴』昭和18年（1943年）12月，比島防衛49。防衛省防衛研究所図書館戦史史料（東京）。
13) Interview with Antonio Benedicto, on 6 November 1944 in Memorandum for the officer in charge by 459th Counter Intelligence Corps of the US Army, on 8 November 1944 in Pastor Salazar vs. People of the Philippines with Criminal Case No. 2235, People's Court Papers, University of the Philippines Main Library, Special Collections.

States Forces in the Philippines, USFIP）による激しい抵抗を受け，前者は4月に降伏し，そして後者は5月に米比合同軍司令官ジョナサン・ウェインライト（Jonathan Wainwright）によってようやく正式に日本軍に降伏した。その後，そのウェインライト将軍の降伏命令に従わなかったUSAFFE（以後ユサフェと称する）のメンバーがそれぞれの地元に帰り，独自の抗日ゲリラ集団を組織した。いわゆる「ユサフェゲリラ」の始まりである。

マニラから遠く離れたレイテでも状況は同じであった。レイテは，日本軍のフィリピン侵攻時，フィリピン軍（The Philippine Army）とフィリピン警察隊（Philippine Constabulary, PC）の一部部隊が治安を維持するだけで，日本軍の侵攻に備えるだけの兵力はなかった。ここにはルペルト・カンレオン（Ruperto K. Kangleon）大佐が1938年から1941年まで率いていた第9軍管区（9th Military District）に属する米比合同軍約1,200名及びフィリピン警察隊約150名しか存在しなかったという。この二つの組織は，アメリカ人将校コーネル（Theodore Cornel）大佐によって合併統一され，レイテ暫定部隊（Leyte Provisional Regiment）となり，レイテ・サマール島唯一のユサフェが編成されていた［Baclagon 1966: 438–439; Chaput 1977］。こうした中，1942年5月，日本軍のレイテ侵攻時，このレイテ・サマール島のユサフェも日本軍に正式に降伏した。その後，1942年5月以降，レイテ島でも日本軍への降伏を拒否した元ユサフェ成員を中心とする様々なゲリラ組織が編成されるようになった。

一方で，ユサフェあるいは米比合同軍がバタアンやコレヒドールで戦っていた頃から，実はレイテ各地では様々なゲリラ集団が組織されていたといわれる。その大半は，盗賊的な色彩が強い「ごろつき」集団であり，中には元々地主の下で「下男」や「下女」として働いていた地元住民が，戦争という状況を利用して今までの低身分でのうっ憤を晴らすような集団も存在していた。奪った武器で裕福層から金品を強奪し，また婦女子を強姦，暴行，殺害する自称「ゲリラ」もいた。[14] こうした組織は元来，各町々にあったという「自警団」（Voluntary Guard, VG）が職のない小作人に呼びかけて作った新たな「抗日組織」であり，最後には統率のとれない散在的な組織へと変化していった。こうした集団が最終的に米軍の降伏命令に従わなかった元ユサフェらが組織するゲリラ集団に統合されていったと思われる［Baclagon 1966: 439; Constantino 1984: 135］。アメリカの歴史家レアによれば，レイテにおけるゲリラの組織化は，日本軍のレイテ侵攻後，約半年たった1942年の10月から12月頃に顕著だったという［Lear 1951: 216–222］。1942年12月にトーレス州知事の代理を務めたパストール・サラサールは，マニラの比島行政府（Philippine Executive Commission）にレイテにおけるゲリラ状況を書き綴っ

14) こうした状況を描いたフィリピン映画として，1982年のペケ・ガリャガ（Peque Gallaga）監督による *Oro, Plata, Mata*（金，銀，屍）がある。日本占領期を描いたフィリピン映画としては珍しくフィリピンの地方（ネグロス島）を舞台とした二つのエリート一族の相克を「盗賊」的抗日ゲリラとの関係を絡めながら展開させている。

ている。それによると当時のレイテ島には次のような抗日ゲリラ集団がいた。[15)]

エルフェ少尉 Captain Erfe（元ユサフェ）：ブラウエン町 Burauen，ラパス町 La Paz
バルデリアン軍曹 Sergeant Alejandro Balderian（元ユサフェ）：ダガミ町 Dagami
アントニオ・シンコ Antonio Cinco，ニエヴェス・フェルナンデス Nieves Fernandez：タナウアン町 Tanauan，トロサ町 Tolosa，ダガミ町 Dagami
フィレモン・パビロナ軍曹 Sergeant Filemon Pabilona（元ユサフェ）：アランアラン町 Alang-alang
フェリックス・パマニアン軍曹 Sergeant Felix Pamanian，ピオ・オルティス Pio Ortiz，キエルフ軍曹 Sergeant Kierulf（それぞれ元ユサフェ）：カポーカン町 Capoocan，カリガラ町 Carigara，バルゴ町 Barugo
グレゴリオ・ミラリエス軍曹 Sergeant Gregorio Miralles（「ならず者集団」）：ハロ町 Jaro
アントニオ・ヘレス Antonio Jerez（盗賊）：ナヴァル町 Naval
ブラス・ミランダ中尉 Lieutenant Blas Miranda（元ユサフェ）：オルモック町 Ormoc，アルブエラ町 Albuera
ヌキ中尉 Lieutenant Nuque，フランシスコ中尉 Lieutenant Francisco（元ユサフェ）：マリトボク町 Malitbog
ラウデ Laudet（盗賊）：ヴィリャバ町 Villaba
ペドロ・ガリェゴ Pedro Gallego（前アブヨグ町長），カタリーノ・ランディア Catalino Landia（アブヨグ町警察署長）：アブヨグ町 Abuyog

他にも前述した小規模な「抗日」と称するゲリラ組織が存在していたといわれるが，詳細は不明である。この状況は，翌年の1943年以降より一層複雑化する。一時期，日本軍に捕らわれ降伏していたカンレオンが1942年12月23日，ミンダナオ島アグサン州ブツアン（Butuan, Agusan）にあった日本軍の捕虜収容所からの逃走に成功し，レイテ南部の故郷マリトボクに到着し，その後独自の抗日ゲリラ集団を組織し，島内に散在していたゲリラ集団の統一化をもくろむようになった［Baclagon 1966: 446–447］。1943年1月あたりからレイテ島北部のバルデリアンを筆頭に多くのゲリラ指導者たちはカンレオンの計画に賛同し，バルデリアンが中心となって同年3月比島行政府（対日協力政府）とは別にレイテの抗日ゲリラ政府として「コモン

15) Salazar to Philippine Executive Commission, on 4 December 1942 in Pastor Salazar, PCP. なお，各階級は自称であり必ずしも正確ではない。中には日本占領中に「昇級」したものも存在する。例えばダガミのバルデリアンは，戦時中には2nd Lieutenant（中尉）に昇級し，戦後間もなくしてフィリピン軍の Major（少佐）になった。

ウェルス政府」または「自由レイテ地区」（Leyte Free Area）と称するゲリラ民政政府（州知事，サルバドール・デメトリオス Salvador Demetrios）を樹立した［*ibid.*: 458］。いっぽうで，オルモック近郊に勢力を維持し，ミランダが率いる西部レイテ・ゲリラ戦闘軍（Western Leyte Guerrilla Warfare Forces, WLGWF）とレイテ東部のエルフェ（Glicerio Erfe）らはこのカンレオンの統一計画に反対し，同年8月5日には，ミランダとカンレオン配下のデガルシア（de Garcia）少佐との間で武力衝突がレイテ島南西部の町バイバイ（Baybay）で発生した。[16)]

この武力衝突の背景には様々な要因が考えられる。当時カンレオンは連合国軍西南太平洋司令部のダグラス・マッカーサー（Douglas MacArthur）と緊密な連絡を取り，レイテにおける抗日ゲリラ戦線についての正式な掌握権を取ろうとしていた。このため，それを巡ってミランダやエルフェといった他のゲリラ指導者が政治的に反発したことは否めない。また一度日本軍に降伏したカンレオンが再び指導者として復活することに対する反感もミランダにあった。[17)]

いずれにしてもレイテの抗日ゲリラ戦線は，「対日抵抗」という軸で一枚岩になれなかった。2年6カ月ほどに及ぶ日本のレイテ占領は，こうした戦前からの政治状況とその後の抗日ゲリラの組織化状況の中で展開された。他のフィリピンの日本占領地域と同様，ここレイテにおいても，「対日協力」という観点から見て純粋な意味での日本への傾倒という対日協力にはほど遠く，アメリカに代わる新しい「植民地者，日本」を受け入れながらの「にわか仕込み」あるいは「消極的な対日協力」であった。レイテの各町の行政府の長であった町長らのほとんどは，日本軍のレイテ侵攻時，独自の抗日戦線の設立に奔走したが，最終決定として「対日協力」をするものと，山岳地へ逃避し「対日抵抗」をするもの，に二分された。しかし，どの決定も徹底的な協力あるいは抵抗というほど明確なものではなかった。そこにはそれぞれの土地に存在したスペイン，アメリカ時代から続く派閥政治の論理も背景にあった。

IV　駐留日本軍によるレイテ軍政

ところでこのような抗日ゲリラ組織に支配されているレイテを駐留日本軍は，どのように捉え，またどのような占領政策を行おうとしていたのだろうか。明確に断言はできないが，日本軍がレイテ占領について具体的に踏み込んだ政策を打ち出したのは恐らく1943年11月以降であったと思われる。占領当初，抗日ゲリラの抵抗が激しかったとは言え，日本軍の軍政は概して穏やかであったという。米，豚のほか徴発するのもがほとんどなかったからである。他の

16) この段落での記述は，Baclagon の著書以外に，次のゲリラ文書中で散見される文書等も参照した。Report of the Leyte Area Command, Guerrilla Recognition Files, Folder 17-1, Entry No. Philippine Archives Collection, Box 285, RG407, NARA2.

17) Report on the Western Leyte Guerrilla Warfare Forces and Various Information, 23 October 1944, Folder 17-14, Entry No. Philippine Archives Collection, Box 286, RG 407, NARA2.

フィリピンの占領地と同様に治安維持の観点から，駐留日本軍はレイテ州内の政治に深く関与せず，民政は旧コモンウェルス体制を堅持しながらフィリピン人に任せられた［大岡 1980: 34–35］。従って駐留軍の活動のほとんどは，抗日ゲリラ討伐に向けられた。永野支隊（歩兵第62連隊を基幹とする部隊）及び松永部隊から各遠隔地に警備隊が派遣されたが，ゲリラ活動が活発になる1942年10月頃にそのほとんどが撤収してしまった。このためレイテにおいて具体的な占領政策が明確にされるのは，歩兵第20連隊や歩兵第9連隊が増援部隊としてレイテに集結し始める1943年11月以降である。

第16師団の内部文書によれば，既に論じたカンレオンとミランダの確執は駐留日本軍も認識しており，抗日ゲリラ戦線に統一性が無く，こうしたゲリラ組織が住民にとって恐るべき存在であると述べ，それでも「住民ニシテ皇軍ノ温容ニ接セサルモノ大部分ナルニ鑑ミ近ク部隊ノ進駐完了ニ伴ヒ独立ノ好機ニ乗ジ徹底セル宣撫ト果敢ナル討伐ヲ以テセバ全匪ノ崩壊ハ比較的容易ナリト思科ス」と楽観的な見方をしていた。[18] また他の16師団文書には，住民への直接の宣撫活動を活発化させることで治安維持活動にある程度の成果を収めることができた例が示されている。例えば，占領当初，松永部隊の一小隊であった福田隊が進駐したカリガラ，トンガ（Tunga），バルゴ，レイテの各町では，住民のほとんどが抗日ゲリラと密接な関係を有していたが，その後の活発な宣撫活動や分断支配で1943年10月中旬わずか500人程のカリガラ町が，11月上旬には下山した住民で1万5,000人程までに膨れ上がったと記録されている。[19] また，第16師団は，レイテ住民のほとんどが教育のない人々で構成されているため，比較的容易に分断支配が行えると確信していた。また，進駐した各警備隊の隊長（中隊長あるいは小隊長クラスの中尉から准尉などの将校）には軍政を施行するうえである程度の自由裁量が認められ，各町々においてそれぞれ独自の占領政策が行われていた。対日協力町長がゲリラと密通することに目をつぶった司令官がいる中で，町内の民政に直接関与する司令官は少なかった。一方で，各司令官らは抗日ゲリラ集団討伐が主だった任務であったためゲリラ嫌疑者の摘発や食料調達には厳しい態度で臨んだ。

このようにレイテ駐留の各司令官たちは，駐留日本軍やゲリラ組織へ「二重協力」を行う町長たちへは宥和的な政策をとる一方，治安維持には容赦せずという極めてアンビバレントな軍政を施行した。投降を拒否するゲリラについてもう一つの1943年12月上旬の第16師団内部文書には，「又民心若シ我ニ随ハズ且武力匪我ニ投降セザレハ果敢ナル武力的討伐粛清ヲ実施ス」とあり，[20] 初期の穏やかなレイテにおける軍政が占領後半を期して次第に厳格になっていく様を示している。

18)「垣」部隊討伐粛清報告，昭和18年（1943年）12月2日，『第11独立守備隊比島討伐に関する書類その2』比島防衛296。防衛研究所図書館戦史史料。
19)『第十六師団（垣）情報記録綴』昭和18年（1943年）12月。
20)「レイテ・サマール島討伐粛清要領」『第十六師団（垣）情報記録綴』昭和18年（1943年）12月。

このような日本軍のレイテにおける軍政がレイテそれぞれの町での占領展開にどう反映されていくのかを日本占領中，政治抗争が顕著となったオルモック町，アブヨグ町，ラパス町三つの町の状況を見ながら考察してみよう。ちなみにこの三つの町は，戦前から政治的にヴェローソ・サラサール体制影響下にあった町で，コモンウェルス期より各町の町長はすべてナショナリスタ党の推薦を得て当選している。

V　オルモックにおける政治抗争

V–1　オルモック町のヘルモシリャ町長を巡る政治抗争[21)]

オルモックは，レイテ西部の主要都市の一つでカモテス海（Camotes Sea）のオルモック湾に面した風光明媚な町である。レイテ島は中央山脈を境に言語地図が分かれ，レイテ東部はワライ（Waray-Waray）語，西部はセブアノ（Cebuano）語が話されており，オルモックでは住民のほとんどはセブアノ語を話す。1939年の統計によれば，人口は7万7,000人ほどで主要基幹産業は，スペイン時代から大地主による大規模プランテーション農法によって生み出されるサトウキビがほとんどであった［Philippines, Commission of the Census 1940］。他の米やトウモロコシといった食糧生産もレイテ島全体の生産高の中でとりわけ高く，オルモックに駐留を開始した日本軍にとって食糧自給の観点から極めて重要な町であった。

オルモックはレイテ島北西部に位置しており，日本占領期においては政治的には前述したホセ・ヴェローソ並びにパストール・サラサールの影響下にあったといえる。スペイン時代末期1834年にソフロニオ・カビリング（Sofronio Cabiling）が初めてオルモックの町長（gobernadorcillo）に任命されて以降，本格的なオルモック町政が始まった。その後，20世紀初頭，ここはアメリカの植民地支配以降のファウスティーノ・アブレン（Faustino Ablen）が率いるプラハン反米運動の拠点にもなった町であるが［Tantuico 1964: 194］，これが鎮圧されてからは，サトウキビ栽培などで多大な利益を得ていた複数の有力大地主（例えばタン（Tan）家，コディリャ（Codilla）家，ララサバル（Larrazabal）家，ヘルモシリャ（Hermosilla）家等）が町政の実権を握るようになった。オルモック町政についての歴史資料は極めて乏しく，筆者が知る限りにおいては，フィリピン・コモンウェルスが発足する1年前，1934年にオルモック町長に選出されたヴィクトリオ・ラウレンテ（Victorio Laurente）が前述のカビリングを除いた今のところ私たちが知りえる一番古い町長である。[22)]

アメリカ植民地期の地方町長選は法律により3年に一度行われていた。このような比較的短

21）この章の詳細は，筆者［Ara 2012］の英文論考を加筆修正し，それに基づいている。
22）Affidavit of Rafael Omega to CIC, on 5 February 1945 in Catalino Hermosilla vs. People of the Philippines with Criminal Case No. 468 Box 146-10 in PCP, University of the Philippines Main Library, Special Collections.

い任期のためかその選挙戦は熾烈を極めたという。オルモックもその例外ではなく，日本軍が占領を開始するまでの選挙（1934年，1937年，1940年）ではその都度多くのオルモックのエリート階級出身の政治家が選挙戦に立候補し，しのぎを削った。その中に後に町長となるカタリノ・ヘルモシリャ（Catalino Hermosilla）がいた。ヘルモシリャは1898年4月，同町のスペイン系移民ヘルモシリャ家で生まれ，セブの大学を卒業後，地元に帰り小学校や高校の教師になったが，1922年に副町長に当選して以降，政治的知名度を上げ，後に町議会議員やラウレンテ町長の下で副町長を務めた後，1940年12月に行われた町長選で，現職のマリオ・コディリャ（Mario Codilla）など複数の候補者を破り町長に就任した。[23] ヘルモシリャ家とコディリャ家は現在に至るもオルモックの有力地主であるが，カタリノは，この選挙で他の多くの政敵（カエタニョ・マニャゴ Cayetaño Mañago，フォルトゥナート・アベリャーナ Fortunato Abellana，プロコピオ・ガキト Procopio Gaquit 等）を破っており，この町長選がいかに熾烈であったかを物語っている。[24]

ところで，日本軍がオルモックを占領したのは，永野支隊のカポーカン上陸直後であったと想像される。筆者が検証した日本軍側史料によれば，永野支隊がタクロバンを占領した1942年5月上旬，その支隊から阿部大尉率いる中隊がオルモックの進駐を担当した。その進駐の時期は不明だが，著者が検討した一方のフィリピン側史料（特別国民裁判記録文書 PCP，People's Court Papers に散見される CIC，Counterintelligence Corps 文書等）を吟味すれば，おそらく同年の6月か7月以降と思われる。その阿部部隊は，その後同年10月頃，平山大尉が率いる中隊に引き継がれた。オルモックは，前述したように住民のほとんどが大土地を所有する裕福層か比較的教育の高いエリート層によって成り立っており，駐留日本軍の占領が比較的スムーズに進んだ場所である。そしてこの町は，他の遠隔地の町々と異なり，抗日ゲリラによって奪還あるいは占領されず，日本軍が米軍の攻撃によって撤退するまでほぼ2年6カ月間完全に日本軍によって占領された町である。

阿部部隊が駐留した時期，前述したオルモック町長カタリノ・ヘルモシリャは，家族と共にオルモック郊外にあるドロレス（Dolores）村に避難していた。ここにはヘルモシリャ家が所有する牧場があり，ヘルモシリャ町長はここで対日協力か対日抵抗かの選択を迫られていた。日本軍侵攻時，前章で触れたようにヘルモシリャ町長は当時元ユサフェのメンバーでフィリピン軍の将校であったブラス・ミランダと緊密な連絡を取りながら，当初同町長は抗日戦線をミランダと形成しようと目論んでいた。しかしながら，1942年10月頃この目論みはヘルモシリャ家のもう一方の政敵であったタン家によって阻まれてしまった。というのもタン家がヘル

23）"Mayor Election Results," *Tribune*, 14 December 1940, p. 11.
24）Affidavit of Enrique Omega to CIC, on 5 February 1945, Catalino Hermosilla PCP.

モシリャ町長のゲリラ密通をオルモック駐留の平山部隊に密告したからである。ヘルモシリャ家にとってこのような反動的な動きがタン家にあったことは予想しなかったことであり，これにより表面上ヘルモシリャ町長はミランダとの関係を断絶したという。この密告によりヘルモシリャ町長は平山部隊の憲兵隊に逮捕され拘留された。厳しい取調べが行われたが，同町長は町内の治安維持を目的とする「自警団」いわゆる Home Guard の結成と駐留日本軍部隊への協力を約束し釈放された。[25)]

しかしながらヘルモシリャ町長はミランダとの連携を完全に断絶したわけではなかった。平山部隊への協力を表明した町長は，町政執行のため避難先のドロレスから町の中心地へと移動し，自警団活動に奔走した。一方でヘルモシリャ町長は，密かに抗日戦線という大義名分で政敵抹殺のため引き続きミランダ率いるゲリラ組織と連絡を取っていたのである。戦後，ヘルモシリャ町長の対日協力を調べたフィリピン軍所属のバカルソ大尉（Lt. Bacalso）作成のフィリピン軍へ提出された文書によれば，ヘルモシリャ町長が町の中心部へ移動した 1942 年 10 月頃，以前からの政敵抹殺計画実行のため，ミランダへ書簡を送り，前述した 1940 年 12 月の町長選挙の対立候補のうちの何人かを殺害させたのだという。バカルソ大尉はこの調書の中で「この殺害計画は相当以前より立てられたものであり，殺害された政治家のすべてがヘルモシリャ町長の政敵である。これについては，すべてのオルモック町民は知っている」と強調している。[26)] 報告書によれば，3 件の殺害事件にヘルモシリャ町長は関与していたのだという。

第一の殺害は，マニャゴに対する殺人である。オルモック駐留の CIC は，戦後ヘルモシリャ町長が関与した殺人事件について，ラファエル・オメガ（Rafael Omega）という元ミランダの部下による宣誓供述書等に基づきさらに詳細な報告書を作成している。それによると，ヘルモシリャ町長は，前述した 1940 年 12 月の町長選挙の有力対立候補マニャゴをミランダの部下を利用して殺害させたのだという。殺害は，1943 年 12 月あるいは翌 1944 年 1 月頃に行われた。オメガの供述書によれば，その殺害の背景は次のとおりである。

1943 年の暮れ，高血圧症で苦しむヘルモシリャ町長を更迭させ，他の有力な政治家に町長職を引き継がせる動きが出た。オルモックの町政に影響力を持つヴェローソ前上院議員（1934 年の第 10 フィリピン議会選挙において上院議員に選出されていた）が，自分の知己の友人であり当時弁護士であったマニャゴをオルモック町長に推薦した。しかしながら，マニャゴは当時オルモック郊外ドロレスに避難してゲリラリーダーであるミランダと連携しており，このヴェローソの推薦を辞退したという。[27)] また，当時のオルモック在住の日本人実業家「伊藤」は，平山部隊長に一度選挙で負けた候補者を町長に任命するのはよくない，という提言を行ってい

25）Interview of CIC with Vicente Tomada, on 15 February 1945, Catalino Hermosilla PCP.
26）Report of Lt. Bacalso to Philippine Army Ormoc, on 11 February 1945, Catalino Hermosilla PCP.
27）Affidavit of Rafael Omega to CIC, on 5 February 1945, Catalino Hermosilla PCP.

た［Lear 1951: 395］。

一方で平山大尉は，ある程度ヘルモシリャ町長とミランダとの関係を黙認していたにもかかわらず，ヘルモシリャの日本軍への協力関係に若干の疑いを持っていたとされ，ヘルモシリャ町長の更迭と交代には相当積極的であった。ただ平山大尉は，ヘルモシリャ町長の一人娘と当時恋愛関係にあり，[28] ヘルモシリャ家にある程度の思い入れが強かったというが，最終的に同町長の更迭を命令した。結果，1944年1月6日，ヘルモシリャ町長のかつての政敵の一人ホセ・コディリャ（Jose Codilla）が新しい町長に任命された。町長職から去ることになったヘルモシリャは，この更迭劇をきっかけに政敵マニャゴをミランダに依頼し，ドロレス近郊で待ち伏せし殺害した。[29]

第二の殺害は，もう一人のヘルモシリャ町長の政敵であったフォルトゥナート・アベリャーナへの殺害である。アベリャーナがどのような背景の人物であったのかについては不明である。彼は，1940年12月のオルモック町長選にも出馬した人物で，日本占領時代はヘルモシリャ町長によって自警団（Home Guard）のメンバーにも就任していた。平山大尉は，アベリャーナが非常に日本軍に忠実であるとして，その後，自警団のメンバーからフィリピン警察隊（Philippine Constabulary）オルモックの幹部へと抜擢した。ヘルモシリャ町長はこのような元政敵がオルモック町政になんらかの影響を与えるとでも思ったのだろうか。アベリャーナの内縁の妻であったナティヴィダド・ダトォーン（Natividad Datoon）は，戦後CICに提出した供述書に自分の内縁の夫がどのようにして殺害されたかを述べている。それによると，1943年の半ば頃，オルモック警察の警察官数名が夜中にアベリャーナの自宅を突然訪れ，何の説明もなく彼を連行したのだという。そしていきなり警察官の中の一人が大きい長刀をアベリャーナに振りかざし，胸を切り付け，負傷したアベリャーナをオルモック町内のアニラオ川（Anilao River）まで連行し，その川辺で彼の頭部を切り落とした。

第三の殺害は，ペドロ・アレホ（Pedro Alejo）とプロコピオ・ガキトの同時殺害である。これについてはソテロ・バニェス（Sotero Bañez）というミランダのゲリラ側元スパイが供述書で詳細を綴っている。この二人がいつ殺害されたかは不明であるが，町長側とゲリラ側を行き来していた連絡係であったバニェスは，この二人の殺害はミランダの本拠地内で行われたと証言している。バニェスによると，この殺害の実行犯は，当時のオルモック警察署長であったフアン・ティラド（Juan Tirado）であったという。バニェスの供述内容を確かめるべく，CICによる調査を後押ししたバカルソ大尉は1945年2月上旬頃，オルモック町内にあったというティラドの自宅を訪れたが，ティラドはその日，病気を理由にバカルソ大尉との面会を断った。翌

28) ホセ・ヘルモシリャ（Jose Hermosillaカタリノ・ヘルモシリャの息子，アメリカ，カリフォルニア州在住）から筆者への書簡。2006年11月10日。
29) Affidavit of Rafael Omega to CIC, on 5 February 1945, Catalino Hermosilla PCP.

日に再び会う約束をしてその日はその場を立ち去ったバカルソ大尉であったが，翌日ティラドの自宅を訪れたら，本人のみならず家族全員がどこかへ越してしまって会うことができなかった。バカルソ大尉は，当時まだCICに逮捕されていなかったヘルモシリャ元町長が何らかの政治的圧力あるいは脅迫をティラドに与えていたのではないかと推測し，ティラドに上記二人の政敵の殺害を命じたのは明白である，と報告書で述べている。[30]

その他，ヘルモシリャは，町長在職中，過去にオルモックを中心に展開されていたプラハン反米運動家アブレンの末裔で日本占領当時，オルモック北西部の海岸の町パロンポン（Palompon）で「非合法的な」医療活動を行っていたというマリアノ・ラウレル（Mariano Laurel），いわゆる「ボゴトン」（Bongoton）[31] の処刑にも関わった。オルモックの大地主でヘルモシリャ家とも親族関係にあったララサバル家は，アブレン側の子供と婚姻関係を結んでいた。レイテ地方史家エミール・ジュスティンバステ（Emil Justimbaste）によれば，この婚姻関係によってララサバル家がプラハンのような反体制運動に影響されないことを望んでいたのだという。[32] ヘルモシリャ町長は，パロンポン町長のアルフレド・パリリャ（Alfredo Parilla）と密に連絡を取り，1942年7月上旬，パロンポン警察によってラウレルの身柄を確保し，ラウレルはオルモックへ移送された。[33] 平山大尉は，ゲリラでもないラウレルの処置に困惑したが，ヘルモシリャ町長による再三の処刑懇願に応じ，同月中旬頃，平山大尉の手によってオルモック町庁舎前で公開斬首を決行した。この処刑について詳細を綴ったペドロ・ゴンザルヴェス（Pedro Gonzalvez）というオルモック実業家によれば，ラウレルは元々ララサバルと繋がりの深いヘルモシリャ町長の政敵の一人であったという。[34] 実際，ラウレル率いる医療宗教団体が抗日ゲリラと関係があったとは言い難く，その部分についての背景知識が全く無かった駐留日本軍は，ヘルモシリャ町長の要求にこたえるまま，その処刑に応じたといえる。つまり，この出来事は，ある意味でヘルモシリャ町長が目論んだ事実上の政敵殺害と言えよう。

以上のような政敵殺害に関与する一方でヘルモシリャ町長は，先に述べた自警団の活動を積極的に推し進めた。ヘルモシリャ町長は，1942年12月頃からミランダが率いるゲリラからの攻撃が激しさを増し，町内での食糧確保が困難になっている状況を踏まえ，治安維持の観点からこの頃結成された自警団への十分な武器供与をトーレス州知事に訴えている。[35] その後，オルモックの自警団活動はかなりの成果を上げたようで，第16師団の文書によれば，治安安定

30) Report of Lt. Bacalso to Philippine Army Ormoc, on 11 February 1945, Catalino Hermosilla PCP.
31) Bongotonとはフィリピンの言葉で「長いひげをもった男」のことを指す。
32) エミールから筆者への電子メール。2011年11月30日。
33)「ボゴトン」グループの活動の中心は，パロンポン町のサンヴィセンテ（San Vicente）村であったという。詳細は，CIC Report (Memorandum for the Officer in Charge) on 9 August 1945 in Alfredo Parilla vs People of the Philippines with Criminal Case No. 5164を参照のこと。
34) Pedro Gonzalvez, CIC interview, on 23 May 1945, Catalino Hermosilla PCP.
35) Hermosilla to Governor Torres, December 1942, Catalino Hermosilla PCP.

とともに日本軍侵攻時，山岳部へと避難していた住民が占領中期の1943年10月以降，続々と町に戻るようになったという。[36]

自警団はこのようにある程度の成果を収め，ヘルモシリャ町長下での町制の円滑化に貢献した。前述した政敵殺害事件があまりにも血なまぐさい出来事だったにせよ，ヘルモシリャ町長は平山部隊と順調な関係を保ち，オルモックの治安維持に邁進したが，戦時中の食糧増産については成功しなかった。レイテの食糧増産は，マニラの比島行政府長官ホルヘ・ヴァルガス（Jorge Vargas）による行政命令72号の隣組（District and Neighborhood Associations, DANAS）の組織を利用して行われた。[37] DANASのオルモックにおける活動は自警団の活動を補助しながら行われた。治安維持活動を遂行することで食糧増産が目論まれていたのである。1943年後半，平山部隊の下で「農民勤労奉仕隊」が結成され，米，サトウキビ，トウモロコシ等の増産を目標として荒地の開墾及び農耕が奨励された。[38] しかしこうした駐留日本軍の思惑とは正反対に，ヘルモシリャ町長は，DANASを通して適宜に町民に分配されるはずの食糧を自己の利益獲得のために利用し，自己の経済的既得権益を増大させた。

この点に関してラファエル・オメガが作成した供述書によると，ヘルモシリャ町長は，自分の部下に命令して，平山部隊の「シンカイ」軍曹と共にオルモック湾のパトロールにかこつけ，セブから運搬される食糧運搬船を多数拿捕し，それら食糧を没収し，町庁舎の裏にあったという倉庫に保管したという。数日たって，ヘルモシリャ町長は，その多くを自分が経営していたとする食糧販売店で高額な値段で販売した。この販売には，自分の配下にあった自警団のメンバーで甥にあたるフランシスコ・ヘルモシリャ（Francisco Hermosilla）も関わっていたという。またヘルモシリャ町長時代，町会議員をつとめたペラヒオ・コディリャ（Pelagio Codilla）によると，ヘルモシリャ町長は，当時町の対日協力者でもあったアガピト・ポンゴス（Agapito Pongos）並びにエヴァンヘリスタ弁護士（Atty. Evangelista）と共に「モスカヴァド」（moscavado）種のサトウキビ栽培を奨励するため，町民の強制労働確保に乗り出した。そして，サトウキビの収穫物のほとんどを自分の甥であるフランシスコの管理のもとで販売しようと計画したという。[39]

加えてオメガは供述書の中で，日本軍がオルモックに侵攻した頃の町の財政が極めて逼迫していた点を強調し，その一方でヘルモシリャ町長の所有する財産が異様なまでに増大したことを指摘している。またオメガによれば，ヘルモシリャ町長の在職期間中の給与は多かれ少なかれ毎月40ペソであり，その限られた報酬でオルモックから北へ約25キロいったカナンガ

36)「レイテ・サマール島討伐粛清要領」『第十六師団（垣）情報記録綴』昭和18年（1943年）12月。
37) "To Create District, Neighborhood Associations," *Leyte Shimbun*, 26 September 1942
38)「レイテ・サマール島討伐粛清要領」昭和18年（1943年）12月。
39) Affidavit of Rafael Omega to CIC, on 5 February 1945, Catalino Hermosilla PCP.

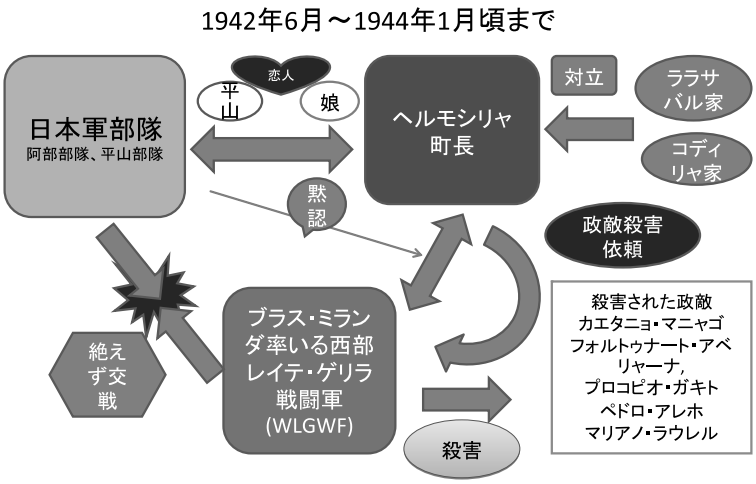

図1　オルモックにおける日本占領の状況とヘルモシリャ町長のゲリラ接触と対日協力等について

（Kananga）に4,000ペソ相当の家を購入したのだという。こうした事実からオメガは，戦前からヘルモシリャ町長が裕福な家庭に育っていたとしても，当時の物価水準などを考えるとそのような大金をわずか2年や3年で蓄積できるのは不自然であるとした。[40] すでに触れたように1944年1月には政敵ホセ・コディリャが町長に任命され，ヘルモシリャ町長は失脚した。しかしその一方で，彼が町長在職中に蓄積した政治権力並びに経済的利権は相当なものであった。

このような中でオルモックの日本占領も終焉を迎えた。1944年10月22日に行われた米軍のレイテ上陸後，海岸防備に配備されていた第16師団の各連隊（歩兵9連隊，歩兵33連隊等）が軒並み壊滅し，タクロバンのフィリピン民政府も崩壊し，ここにコモンウェルス政府が復活した。オルモックには12月頃，中国満州からの増援部隊陸軍第1師団が上陸し，その後増援部隊である26師団も上陸し，有名な日米決戦が繰り広げられた。1945年1月，オルモックでの戦闘で日本軍は敗退し，オルモック駐留軍部隊長平山大尉はオルモック町役場庁舎内で婚約者であったとされるヘルモシリャ町長の娘の前で短銃により自決したと伝えられている。[41]

レイテ各地を「解放」させた米第6軍は，オルモックにおいてホセ・コディリャを更迭し，抗日ゲリラリーダーの一人，ポテンシアノ・ララサバル（Potenciano Larrazabal）を新しいオルモック町長に任命した。対日協力者を執拗に追い回す米軍CICは，オルモックでもカタリノ・ヘルモシリャを逮捕，拘束した。日本占領中，ヘルモシリャの対日協力に否定的な態度をとっ

40）Affidavit of Rafael Omega to CIC, on 5 February 1945, Catalino Hermosilla PCP.
41）ホセ・ヘルモシリャから筆者への書簡。2006年11月10日。ホセ・ヘルモシリャ氏の話では，この娘（匿名）は平山大尉の子どもを妊娠していたという。

ていたララサバル，タン，コディリャによってヘルモシリャの反逆罪を立証するための前述した様々な供述書が作成された。しかしながら，同じ町内における政治抗争やそれにまつわる政敵殺害についての事実は，ヘルモシリャの対日協力そのものを立証する証拠としては不十分であった。そのため1947年に特別国民裁判への起訴後，国家反逆罪の罪に問われることなく釈放された。釈放後，カタリノ・ヘルモシリャはほどなくして持病の心臓病が悪化し死去した。

V–2　戦後のオルモック

ヘルモシリャの対日協力は，その後のヘルモシリャ家のオルモック町政への関わりを弱める結果を生んだ。記録によれば，戦後，一部の町会議員職を除き，カタリノ以外町長に就任したヘルモシリャ家出身のものはいない。その代わり，かつて戦前から敵対していたコディリャ家がオルモックの町政に絶大な権力を保持するようになった。1947年から1959年までオルモック市長（1947年にオルモックはロハス（Manuel Roxas）大統領の命令で市になった）のポストはすべてフィリピン政府の任命であった。その間町長に任命されたのはほとんどがコディリャ，ララサバル派の人物であるイニャキ・ララサバル・シニア（Iñaki Larrazabal, Sr.），マルセーロ・バンダラン・ジュニア（Marcelo Bandalan, Jr.），そしてエステバン・コネホス・シニア（Esteban Conejos, Sr.）であった。1967年の市長選挙では，59年に市長となったイニャキ・ララサバルが再選された。ララサバルは，1984年まで17年もの間市長の座に居座り続けたのである。その後，このララサバルの後を引き継いだのがコディリャ家一派であった。1984年からの度重なる選挙では，ユーフロシオ・コディリャ・シニア（Eufrocio Codilla, Sr.）が2001年まで前ララサバル市長と同様17年も市長として君臨した。現在のオルモック市長は，その息子であるエリック・コディリャ（Eric Codilla）が引き継いでいる（参照オルモック市サイト，www.ormoc.gov.ph）。

ヘルモシリャ家は，カタリノの対日協力問題以降，政治の世界から遠ざかっている。オルモックの人々にとってヘルモシリャ家のオルモック町政における知名度は現在かなり低い。戦後，70年近く経過してもカタリノ・ヘルモシリャの対日協力問題がヘルモシリャ家の政治への関与を阻んでいることは確かである。日本占領は，ヘルモシリャ家を政治的に台頭させたが，同家は，対日協力に消極的であったララサバルと，一方で対日協力をしながらもヘルモシリャに対して批判的な態度を取り続けたコディリャ家並びにオメガ家などとの対立を深めた。その深い亀裂は，戦争が終結した後も尾を引き，現在に至っても政治的禍根を残すことになった。

VI　アブヨグ町の政治抗争

VI–1　ガリェゴとコリャンテスの相克

アブヨグは，レイテ南東部の海岸線に位置する町で，州都タクロバンからはかなりの遠隔地に位置する。永野支隊並びに松永部隊の駐留レイテ日本軍は，占領開始当初，アブヨグのような南部レイテへ中隊及び小隊のような駐留軍を派遣しなかった。抗日ゲリラの勢力が優勢であったことも要因だが，遠隔地に派遣するほど十分な兵力が日本軍側になかったのが一番の要因である。アブヨグそのものの歴史についての史料は乏しく，その経過を遡及するのは極めて困難である。経済的にはコプラの生産高がレイテ州内で一番高く，アメリカ植民地時代，アメリカ人実業家がコプラ生産に関わり，その実業家が地元のフィリピン人女性と結婚しながら事業を続けていたものも多かったといわれている。政治的にはコモンウェルス設立前後より，ペドロ・ガリェゴ並びにリカルド・コリャンテス（Ricardo Collantes）がアブヨグ町の町政を二分する派閥政治を生み出していた。日本占領時代は，この地域に絶大な影響を行使していた抗日ゲリラリーダー，グリセリオ・エルフェ少尉並びにカンレオン大佐の存在がこのアブヨグ町の政治をより複雑にさせた

ガリェゴは，1940年12月の町長選で政敵コリャンテスを破り初めてアブヨグ町長に当選した。記録によれば敗れたコリャンテスは，1931年の町長選で初当選して以来4期連続して町長職にいた。1930年代のアブヨグ政治は，この二人の政治家による派閥政治で特徴づけられる。ガリェゴの下で日本占領中，警察署長を務めたカタリーノ・ランディアの証言によると，この町には元々ガリェゴ率いる「ビト党」（Bito Party）とコリャンテス率いる「ナリブナン党」（Nalibunan Party）の二つの「党」が存在していたという。[42] それぞれの党名は，ガリェゴとコリャンテスが生まれた村名から由来していた。日本軍が町に進駐する以前，ガリェゴ町長とランディア警察署長は，抗日ゲリラの組織化に着手し，自警団（Volunteer Guard）を創設し，町内の抗日戦線を形成した。1930年代，コリャンテス町長の下で副町長を務めたフランシスコ・アウリリョ（Francisco Aurillo）によれば，この自警団は最終的に自然消滅したが，その後実際に日本軍と交戦する目的で町内の知識階層の人々が中心となって新たなゲリラ集団が組織化されたという。1942年5月に永野，松永部隊がタクロバンに進駐した頃，アブヨグにはまだ日本軍は駐留していなかったが，ガリェゴとランディアはお互いに協力し合いながら同年の半ばあたりまで抗日戦線の形成に邁進した。当初，ガリェゴ・ランディアゲリラグループは，他のどのレイテのゲリラ組織の指揮下にも置かれることのない，独立したゲリラ集団であった［Lear 1951: 350–351］。

42) Testimony of Catalino Landia in Transcript of Stenographic Notes in the Reinvestigation of Treason Case, on 2 December 1947, Ricardo Collantes vs. People of the Philippines with Criminal Case No. 5484 Box 74-11 in PCP.

その後，このグループはエルフェの呼びかけに応じて，1942年10月頃にエルフェグループの指揮下に統合された。日本軍は，同年6月下旬頃，松永部隊の一部小隊（おそらく奈良岡少尉率いる部隊と思われる）がアブヨグに駐留したが，このガリェゴ・ランディアグループによる激しい抗日戦で撤退を余儀なくされた。日本軍の撤退後，同グループは「第11レイテゲリラ戦闘管区」（11th Leyte Guerrilla Warfare Division）を結成し，ガリェゴが管区司令官として「ゲリラ中将」に就任した。その後，翌年の1943年4月にレイテゲリラ組織の統一化を目論むカンレオン大佐がアブヨグを訪れ，エルフェら管区首脳と会見し，この第11レイテゲリラ戦闘管区はランディアの同意の元に解散させられたという。このカンレオン大佐による一方的な動きに同意したランディアに対しエルフェは不満を隠せなかった。というのもエルフェは抗日戦線において，独自の勢力圏を保持しようとしていたからである。この態度にランディアは激怒し，エルフェを逮捕した。エルフェの身柄はカンレオン大佐の下に移送された。この一件の後，アブヨグ町はカンレオン大佐率いるゲリラ組織，92師団94連隊（94th Infantry Regiment, 92nd Division，いわゆるLeyte Area Command）の下に完全に統合された。ランディアは，カンレオン大佐によって「東レイテ知事代理」に任命され，エルフェとの関係を完全に断ち切ったのである［Lear 1951: 350–351］。

ところでこのような動きの中，ガリェゴ・ランディア派と対立していたナリブナン党のコリャンテス派の動きはどのようなものであったのだろうか。駐留日本軍は，抗日ゲリラ戦線を創設したガリェゴ・ランディア一派に対抗するためもう一方のコリャンテス派に接近し，軍政を推し進めようとしたのである。前述したように1942年6月頃，奈良岡部隊がアブヨグ並びにドゥラグに駐留したが，この小隊は頻繁にガリェゴ・ランディアのゲリラ集団からの襲撃に悩まされた。こうした中でも奈良岡部隊は，アブヨグにおける占領政策を遂行し，ユーテリオ・カーニャ（Euterio Caña）を日本軍側の町長に任命した。カーニャは，戦前，ガリェゴ町長の下で副町長職に就いた人物であったが，政治的にはコリャンテス派に属していた。同時に，コリャンテス派のリーダー，コリャンテスはカーニャ町長の下での副町長兼財務官（Treasurer）に任命された。実はコリャンテスは，ガリェゴ・ランディア派がゲリラ集団を組織化していた頃，早々と日本軍の依頼により当時ドゥラグの財務官に任命され，一時この町で職務を遂行し，その後，6月にアブヨグに帰郷していたのである。しかしながら，ガリェゴ・ランディア派によるゲリラ組織化が顕著になり，駐留奈良岡部隊が一時退却を余儀なくされると，カーニャ町長並びにコリャンテス副町長らは家族を引き連れタクロバンへと避難した。そこでは対日協力の立場からトーレス州知事の民政遂行に協力し，1943年11月頃，日本軍の増強部隊が続々とレイテに到着して以降，再度アブヨグに帰還した。その後，コリャンテス派は，町政をガリェゴ一派から奪還することに成功したのである。[43)]

43）Interview of CIC with Marcial Costin, a guerrilla intelligent, on 26 January 1945, Ricardo Collantes PCP.

カーニャ並びにコリャンテスが対日協力を承諾した理由にはいくつかの要因が考えられる。まず政治的手腕という点では，コリャンテスのほうがカーニャよりも長けていたことを指摘しなければならない。コリャンテスは元来，戦前より「反ガリェゴ」であり，思想的には元々反米であったという。ガリェゴ・ランディア派の弁護士ベルナルド・クロサ（Bernardo Closa）の戦後の証言によると，コリャンテスは，19世紀の末から20世紀の初頭にかけての比米戦争がレイテにも多くの犠牲をもたらしており，アメリカへの敵対心を周囲にももらしていたという。そのため日本侵攻後は，反ガリェゴの立場と反米感情から対日協力を決断した。[44] カーニャは名目上町長であったが，実際の町政執行はコリャンテスによって行われていた。奈良岡部隊は，元ユサフェゲリラ投降のための宣撫工作を行ったが，ゲリラ嫌疑者の中に戦前のコリャンテス派がいれば，コリャンテス派の政治的思惑に従って即座に釈放するという徹底した反ガリェゴの立場を貫いた。戦前のアブヨグ町の財務官であったエメテリオ・パラニャ（Emeterio Palaña）の証言によれば，コリャンテスは，駐留日本軍の反ゲリラ掃討作戦の際，1940年12月の町長選で住民のほとんどがガリェゴに投票したとされる三つの村，タラゴナ（Taragona）村，パララ（Palala）村，マハプラグ（Mahaplag）村の焼き討ちに積極的に加担したという。[45]

1944年早々，タクロバンの16師団主力部隊が食糧増産運動を打ち出すと，コリャンテスも積極的に日本企業，大同貿易株式会社（現在の丸紅の前身）と共同でアブヨグ町内の軍需目的の食糧調達にあたった。しかし，戦後のCICによる調査によれば，カーニャ並びにコリャンテスは調達量の3分の1を金銭での支払なしに無条件で州政府へと移送しなければならないところを，倉庫に保管してあった調達米を当人二人で山分けし，そのいくらかを自分の友人や支持者へ分配していたという。また食糧増産運動以外にカーニャ並びにコリャンテスは，非常に厳格な税制策を施行し，そこから自己の利益を獲得した。具体的には，通常毎年1ペソであった固定資産税を占領中はその2倍の2ペソに設定し，半分の1ペソを自分のふところへ入れていたという。しかもその税金徴収を逮捕投獄という脅迫の下で住民に強制していった。加えて，コリャンテスは，駐留日本軍と共にアブヨグ町に帰還した1943年11月以降，学校校舎の修復，家具，家屋家財等の接収などにも積極的に関わり，そこから多大な利益を獲得した。掃討作戦においても，ホセ・ゴンサーガ（Jose Gonzaga）並びにフラヴィアーノ・イナテ（Flaviano Inate）というガリェゴ派に属するゲリラ容疑者の逮捕を命じ，1944年2月頃，奈良岡部隊長の手で斬首させた。[46]

こうしたカーニャ・コリャンテスによる対日協力町政も終焉を迎える。1944年7月頃，ラン

44) Interview of CIC with Attorney Bernardo Closa, Abuyog, on 8 December 1944, Ricardo Collantes PCP.
45) Interview of CIC with Emeterio H. Palaña, municipal treasurer of Abuyog, on 23 February 1945, Ricardo Collantes PCP.
46) Interview of CIC with Valeriano Tupa, Vice Mayor of Abuyog, on 23 February 1945, Ricardo Collatnes PCP.

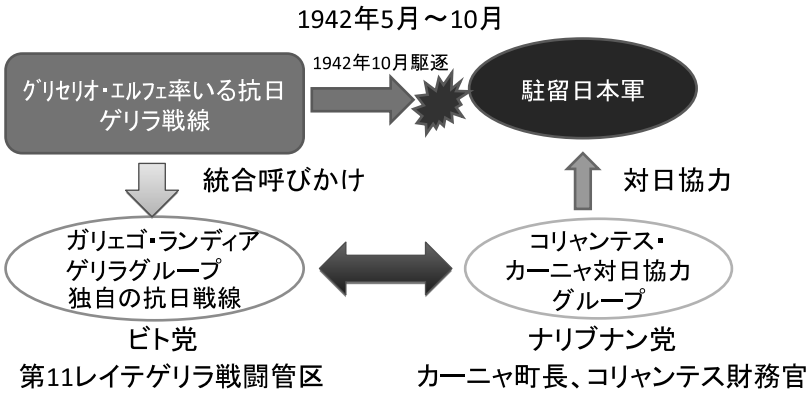

図2　日本占領下のアブヨグの政治状況　その1

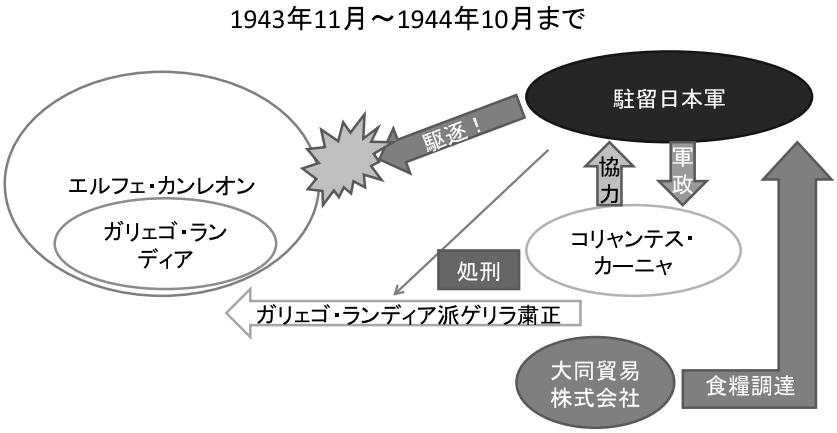

図3　日本占領下のアブヨグの政治状況　その2

ディア派のゲリラがコリャンテスへの襲撃を試みた。試みは失敗するが，ガリェゴグループのゲリラ襲撃が町内で頻発すると，カーニャ並びにコリャンテスは9月にタクロバンへと避難を始める。1944年10月に米軍がレイテに上陸してほどなくしてカーニャとコリャンテスはCICにより逮捕され，同年11月27日にタクロバンにて拘留された。1944年12月13日，アブヨグのガリェゴ・ランディア派から成るゲリラリーダー（Civilian Volunteer Headleaders）たちは一堂に会し，町内の対日協力者たちを非難する声明を発表した。[47)]

47) Resolution passed by the Civilian Volunteer Headleaders and Teniente del Barrio of Abuyog, Leyte, during their Joint Conference held on 13 November 1944, Ricardo Collantes PCP.

VI–2　アブヨグにおける対日協力問題処理

翌年，1945年2月頃からタクロバンのCICは，カーニャ・コリャンテス両名に対するフィリピン・コモンウェルス共和国改正刑法第114条違反，いわゆる国家反逆罪[48]についての調査を開始した。カーニャの対日協力は明白とされ，同人からの保釈請求は却下された。一方，コリャンテスも1年2カ月もの間拘留され，保釈が認められたのは1946年1月であった。特別検察官（Special Prosecutor）は，両名に対する国家反逆罪について起訴が可能と判断し，マニラの特別国民裁判（People's Court）での審理が始まった。対日協力が明白とされたカーニャに対する審理は早く，1947年7月，マニラの特別国民裁判所はカーニャに有罪の評決を出し，禁固15年と罰金5,000ペソを課す判決を下した。[49] カーニャへの有罪判決が出た一方で，コリャンテスの審理は難航を極めた。

マニラの特別検察官ニコラス・ヴィリャフエルテ（Nicolas Villafuerte）は，1946年1月，ちょうど前述したコリャンテスの保釈が認められた頃，コリャンテスの特別国民裁判への13の罪状に基づく起訴を行った。罪状1から7まで（コリャンテスによる反米宣撫活動や日本軍への食糧調達など）は政治的な罪状であり，1948年4月に当時のロハス大統領によって出された「政治的対日協力についての恩赦令」の対象となり，これらについては不起訴とした。問題は，本章でも触れている反コリャンテスゲリラへの容赦ないゲリラ容疑に基づく逮捕と拷問，そして処刑についての真偽である。コリャンテスの対日協力について当初アブヨグ町のゲリラ指導者たちは一致してコリャンテスらの逮捕，特別国民裁判への起訴を望んでいた。しかしながら不思議なことに，その反コリャンテスの先鋒をかつぐはずのガリェゴがヴィリャフエルテ検察官によるコリャンテス起訴からわずか3カ月後の1946年4月になって，コリャンテスの起訴の取り消しを求める書簡をマニラの特別検察官事務所に提出しているのである。加えて，ガリェゴのもう一方のパートナーであるランディアも「コリャンテスが日本占領中町に残って対日協力したのは私たちガリェゴ・ランディアグループの同意のもとだった」とする書簡を特別検察官に提出している。[50]

コリャンテス弁護側の要求に基づいてコリャンテスの国家反逆罪についての再調査が行われたが，弁護側が提出した1948年1月12日付メモランダムによると，戦争直後に証言した多くの目撃者たちがコリャンテスの起訴に興味を示さなくなっていると述べている。また，当時ア

48) フィリピンコモンウェルス期に改正された「改正刑法第114条」Revised Penal Code Article 114である。条文によれば，反逆罪（crime of treason）として起訴するには最低2人の証言者（two-witness rule）が必要で，「反逆」とされる「明白な行為」（overt act）が証明されなければならないとしている。現在のフィリピン共和国刑法の中でもこの条文は残されている。

49) Court Decision in Spanish language, on 7 July 1947, Eleuterio Caña, with Criminal Case No. 224 Box 61-9 in PCP.

50) Amended Information in the case of Eleuterio Caña, PCP, Criminal Case No. 224, on 20 November 1946, in PCP.

ブヨグ町長職にあったランディアはこの年の4月になってコリャンテスが日本占領中の残酷さと過酷さから住民を救ったなどとして，コリャンテスを称賛する町声明を発表した。同時にアブヨグ町議会は，「コリャンテス元町長こそが日本占領から住民を守った」とする声明文を全会一致で決議した。[51)]

ガリェゴやランディアは，コリャンテスの起訴が決まった時点で，手のひらを返すようにコリャンテスに対する態度を180度転換した。筆者は，1995年5月末頃，NHKのドキュメンタリー番組の取材でアブヨグを訪れたことがある。筆者は，当時のことを確かめようとコリャンテスの孫（匿名）にあたる人物との接触に成功し，その詳細について問いただすことができた。それによると，当時，ガリェゴ・ランディア派は対日協力を行い，ゲリラ側のブラックリストにも載っていたコリャンテスへの殺害を計画していたというが，戦後のアブヨグ復興にコリャンテスの政治的手腕が是非とも不可欠だ，という認識があったという。そのため，ガリェゴ・ランディア並びにコリャンテスとの間に密約が交わされ，以前コリャンテス起訴に関連した供述書を作成した証言者が今後一切この事件に関わらない，さもなくば証言者の家族の命が危ない，などとする半分脅迫じみた合意が取り交わされたのだという。[52)]

恐らくそのような密約があったのかもしれない。実際，カーニャが有罪判決を受けた頃，コリャンテスの起訴に関連して証言した（ゲリラ容疑による逮捕，拷問，処刑などについての証言）1945年の目撃者たちは次々と過去の証言を翻し，「あの事件は自分の勘違いであった」等とする宣誓供述書を作成し始めたからである。ガリェゴ，ランディアに至っても過去の政治抗争についての証言を頑なに否定し始めた。マニラの特別検察官は，フィリピン司法省タクロバン支部の検事に，「政治的対日協力以外の罪状は真実に違いない。残念なことに元証言者は完全に態度を翻してしまった。何らかの政治的圧力があることには間違いない。二人以上の証言者が出ない限りコリャンテスに対する起訴を取り下げるしかない」という旨の書簡を送った。[53)]

戦時中，ガリェゴ・ランディアゲリラグループは，カンレオン大佐率いる第94師団の指揮下にあったが，そのカンレオンの強い推薦の元，ランディアは，1946年に行われたアブヨグ町長選に出馬し，当選した。実はこの選挙には，ヴェローソ元上院議員の強い推挙もあったという［Lear 1951: 35］。カンレオンとヴェローソの強い後押しを受けランディア町長は戦後のレイテ政治に君臨することができた。そしてついにランディアは，1949年にレイテ州知事に当選するのである。

---

51) Ricardo Collantes to the Solicitor General, Manila, on 29 September 1946, Ricardo Collantes PCP.

52) リカルド・コリャンテスの孫（匿名）へのインタビュー，1995年5月末頃。（アブヨグにて）

53) Special Prosecutor Filemon Saavedra to the Solicitor General and Head, Office of Special Prosecutors, Manila (through Special Prosecutor Ignacio Debuque, Cebu City), Department of Justice, on 13 April 1948, Ricardo Collantes PCP.

VII　ラパス町の政治抗争

VII–1　アウステロとモロンによる町政

ラパスは，前章で論じたアブヨグ町とドゥラグ町の内陸側中間点に位置した小さな町である。日本占領中の状況は町の大きさとは関係なく，ここでも複雑な政治抗争が頂点に達した。

ラパス町についての歴史もアブヨグと同様，歴史史料が乏しいレイテにおいてもとりわけ不明瞭な点が多い。ボリナガの研究によれば，ラパスではスペイン時代の16世紀以降から住民の居住が始まり，当時のレイテの行政区分プエブロ（pueblo）の一つブラウエンを構成する村の一つであったという［R. Borrinaga 2012］。また，筆者が渉猟しこの研究で使用している特別国民裁判記録の中で記述されているわずかな情報によれば，1930年代から日本占領が開始されるまで，ベルナルド・アウステロ（Bernardo Austero）が何度かの町長選挙を制した有力な政治家であった。当時この町は政治的に二つの派閥に分かれていた。アウステロ率いる「マルコス党」（Marcos Party）と，パブロ・モロン（Pablo Molon）率いる「ビベロス党」（Viveros Party）の二つである。具体的にいつ頃この二つの派閥政治が生まれたかは不明である。このアウステロの町内政治における独裁は，1937年の選挙においてビベロス党のフランシスコ・マラテ（Francisco Malate）により挑戦を受けるが，マラテはこの選挙で敗北した。3年後の1940年12月に行われた町長選挙では，マラテから引き継いだビベロス党のモロンがマルコス党の政敵アウステロを僅かな差で破ったという。これ以降，アウステロとモロンの政治抗争が激化することになる。[54)]

日本軍のレイテ占領から3カ月経った1942年8月に松永部隊の一部小隊がラパスに進駐し警備にあたった。駐留警備隊長（小隊の名前は現在調査中）は，モロン町長の推薦のもとにビベロス党の一派であったペドロ・パラニャ（Pedro Palaña）を町長に任命した。同時にモロン前町長は副町長に就任し，両人とも対日協力を表明した。一方でモロンの政敵であったアウステロは山岳方面へ籠り，当時この近辺に勢力を保っていたエルフェ率いるゲリラ活動へ身を投じた。その時アウステロと共にミゲル・マラテ（Miguel Malate 上記フランシス・マラテとは無関係の人物と思われる）がエルフェ率いるゲリラグループに接近した。戦後のCIC文書によれば，このマラテは，アウステロ前町長の政敵であったが，1942年10月頃，エルフェによってラパス町のゲリラ側の町長に任命されたのだという。このマラテへのゲリラ町長任命劇は，実はアウステロにとっては禍根の残す人事であった。アウステロは，エルフェの意向に逆らい最終的

54) Affidavit of Esteba Aldaba, on 1 May 1944 and question-answer affidavit of Esteban Aldaba, on 6 July 1944, Francisco Militante vs. People of the Philippines with Criminal Case No. 811, PCP. また，ラパス町における二つの派閥についてのCIC報告は，Weekly CIC Report, 28 October–4 November 1944 of 7th CIC Detachment, CIDT-224-2.1, Entry 427, Box 14829, RG 407, NARA2.

に武力でマラテをゲリラ町長の座から引きずり降ろしたという。ところで一時は対日協力を表明したパブロ・モロンは，アウステロが身を投じたエルフェゲリラグループの本部へと赴いた。CIC文書によれば，ラパス町の対日協力町政と山岳部での抗日ゲリラ集団との連絡役として二重協力を行っていたという。従来からの政敵同士が同じ抗日ゲリラ戦線に身を置くという極めて不可思議な状況が1年以上にわたって続く。後に述べるが，このモロンは翌年には日本軍に表面上降伏し，食糧調達活動に従事することとなる。[55]

このようなマルコス党とビベロス党の政治抗争の中でラパス町での日本軍政は始まった。しかし開始早々2カ月ほどでエルフェ率いるゲリラ活動が功を奏し，1942年10月，エルフェ側がラパスを奪回し，記述の通りミゲル・マラテがラパス町長に任命された。[56] このマラテは日本軍がラパスを「再占領」する翌1943年11月までラパス町の町政を行った。1943年11月，第16師団隷下にあった歩兵第20連隊第3中隊を率いる南波少佐がラパスに駐留し警備を担当した。当時ビサヤ諸島全体の掃討を担当していた第20連隊の占領方針に従い，山岳方面に潜んでいるゲリラ集団の投降を促す宣撫活動を積極化させた。この宣撫活動はある程度功を奏し，ガリェゴ・ランディア派に属していた多くの抗日ゲリラメンバーらが下山し駐留日本軍に降伏した。

宣撫活動では住民に穏やかな顔を見せる日本軍並びに対日協力者たちは，治安維持活動に対しては正反対に過酷で厳しい罰則を課すこともあった。このような過酷な占領政策は，ラパス町では1944年4月以降顕著になる。これは，第16師団の主力部隊がレイテに終結した時期と一致している。この時期，第16師団の師団長牧野四郎中将並びに川添参謀長がラパスを訪れ，ラパス住民に対し治安維持の重要性と軍需目的のための食糧調達の理解を求める演説を行っている。牧野中将は「私たちは（ゲリラという）枝よりもその根っこを除去するために進駐した。私の一番の親友は，レイテ島，サマール島，セブ島の人たちである」と述べた。[57]

こうした第16師団首脳がレイテ南部における治安維持を強調したことは，取りも直さず駐留日本軍の治安維持活動も熾烈さを増すことを意味する。こうして対日協力町長ペドロ・パラニャによる町内行政も治安維持活動並びに食糧増産に重点が置かれるようになった。前者の過酷な例の一つとして，ラパス町在住の裁判官アポリナリオ・オリエル（Apolinario Oriel）に対する拷問をあげることができる。オリエルが戦後，CICに語った供述内容によると，南波少佐

55) Guerrilla Mayor Bernardo Austero to US Army in La Paz, on 22 October 1944, Francisco Militante PCP.

56) カンレオンによるゲリラ統一に反抗し，ランディアに最終的に疎んじられたエルフェは1943年の後半（正確な期日不明）ラパス町内で駐留日本軍の掃討作戦で確保され，日本軍によって処刑されたという。ガリェゴは最後までエルフェに忠誠を尽くしていたとされている。

57) Interview of CIC with Apolinario Oriel, Justice of the Peace, La Paz, and Miss Julia Lumen, then a schoolteacher of La Paz, on 5 November 1944, Pedro K. Palaña PCP.

を引き継いだラパス警備隊長奈良岡少尉（おそらくアブヨグ警備隊長と同人物）がオリエル裁判官に対日協力を強要し，同裁判官はその要請を頑なに拒否し，そのためパラニャ町長からの要請で同裁判官は逮捕され投獄されたという。厳しい尋問があり，挙句の果てに残酷な拷問がオリエル裁判官に課された。最終的に，奈良岡少尉は，オリエル裁判官に日本式お辞儀を強制し，その後ラパス町内の隣組組長として対日協力を強要したという。[58]

ラパスでもオルモックの事例と同様，「隣組」が組織化された。パラニャ町長は隣組を利用しながらガリェゴ・ランディア派のゲリラメンバーの逮捕と徹底した食糧調達を行った。こうした中，1943年11月一時はゲリラのもとに身を潜めていたモロンが日本軍に降伏した。モロンは，以前からエルフェより「ゲリラ自警団」の団長（President of the Guerrilla Volunteer Guard）に任命されていたが，駐留日本軍の攻勢が激しくなり，町中心部へと降りてきた。モロンは再び対日協力を表明し，日本軍のための食糧調達に積極的に関わるようになった。熾烈になった治安維持活動では，「隣組」の組織を利用した徹底的な掃討作戦が行われた。1944年1月早々，食糧増産が活発化されていた頃，シメオン・トマダ（Simeon Tomada）というゲリラ容疑者（アウステロ派のゲリラ）が町に潜んでいると，パラナ町長は「ラジオ体操」をしている町民の前で発表した。ラパス町「隣組」第4地区（山岳地域）には多くの盗賊が潜んでいると，パラニャ町長は強調し，幾人かの日本兵警備兵と共にトマダが潜んでいるという第4地区へ，ホセ・ベグノテア（Jose Begnotea）という対日協力者の案内でトマダの潜伏先を発見した。トマダは即逮捕され，投獄，厳しい尋問と拷問の後，奈良岡少尉の手で斬首された。パラニャ町長の下，こうした残酷な方法で犠牲になったアウステロ派のゲリラがかなり存在した。

その中でもエルフェグループのゲリラリーダー，ドナト・バキアノ（Donato Baquiano）少佐の一件も血なまぐさいものであった。バキアノも元来アウステロ派に属するラパス町の有力政治家であり，戦前は弁護士で生計を立てていた一般市民であった。戦前，幾度か町会議員選挙に当選し，アウステロ町長の下で町政に関わった。1944年2月頃，対日協力警察組織フィリピン警察軍（Bureau of Constabulary）がパラニャ町長の命を受け，バキアノ少佐を逮捕した。バキアノは，奈良岡少尉による取り調べを受けた。そして彼は，ゲリラへの「違法な」食糧運搬業務を行った等の罪状で，取り調べ後即刻，奈良岡少尉によってラパス町の庁舎前で公開斬首された。オリエル裁判官とロケ・マルコス（Roque Marcos）弁護士並びにエステバン・アルダラ（Esteban Aldara）というエルフェの元部下が戦後CICに行った証言によれば，パラニャ町長がアウステロ派のゲリラ指導者というだけで奈良岡少尉にバキアノの処刑を懇願したという。[59]

58) Interview with Apolinario Oriel, Justice of the Peace, La Paz, and Miss Julia Lumen, on 5 November 1944, Pedro K. Palaña PCP.

59) Interview of CIC with Roque Marcos and Vicente Marcos, Memorandum for the officer in charge, on 30 November 1944, Pedro K. Palaña PCP.

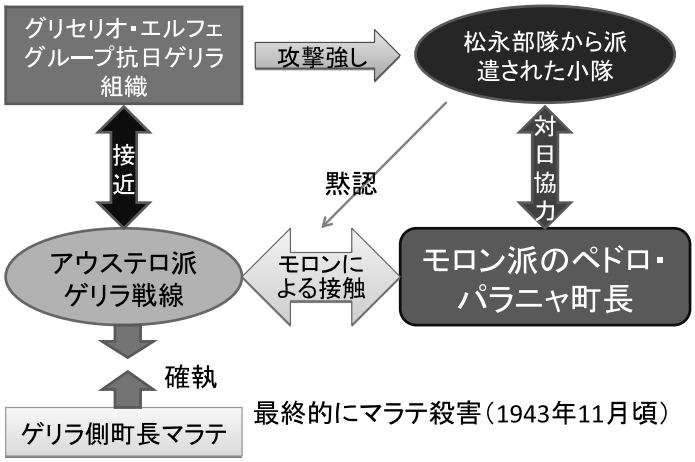

図4　日本占領下のラパスの政治状況　その1

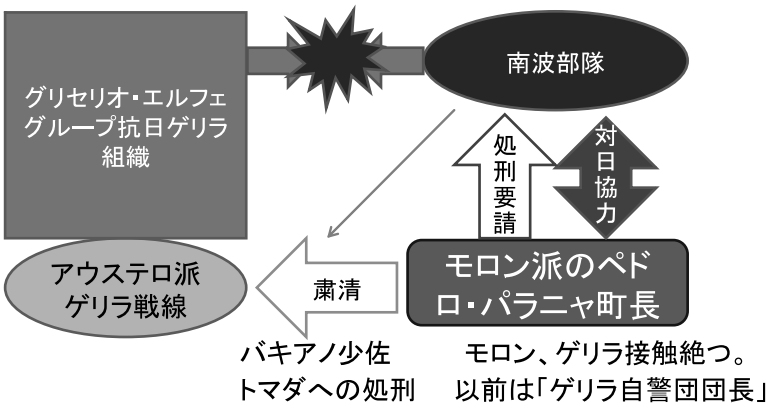

図5　日本占領下のラパスの政治状況　その2

以上の2件だけでもいかにパラニャ町長がこうした日本占領という状況を利用してアウステロ派の粛正に積極的であったかがわかると思う。こうして戦前からのアウステロ派とモロン派の政治抗争は複雑な様相を呈し始める。戦前，アウステロ町長の下で副町長の職にあったフランシスコ・ミリタンテの例を見てみよう。彼もアウステロ派の政治家であったが，日本占領開始当初はアブヨグ近郊でガリェゴゲリラグループの一司令官でもあった。1943年11月以降の日本軍による掃討作戦によってラパス町内で日本軍に降伏し，その後の処置はパラニャ町長に委ねられた。パラニャ町長は逮捕，監禁されているミリタンテの戦前からの政治的手腕を買い，ラパス町の一首脳として勤務させることにした。ミリタンテは対日協力をする一方で山岳部のエルフェグループとの連絡を保ち，時折ゲリラ容疑者の逮捕について協力することもあった。実は，ミリタンテは，すでに述べられたバキアノの逮捕にも関わっていたのである。1944年10月，米軍がタクロバン近郊のパロ，ドゥラグに上陸した頃，ミリタンテは，以前に潜伏していた場所，アウステロゲリラグループの本部へと戻っていた。米軍諜報部隊CICはカンレオン第94師団によって作成されたブラックリストに基づき，ミリタンテを対日協力者として逮捕しようと数々の証拠収集に乗り出していた。モロン派パラニャ町長が去った後のラパス町には，以前のアウステロ派が町政を牛耳るようになった。アウステロ自身は町政に戻ることはできなかったが，カンレオン大佐の強い推薦の下で1944年11月，同じアウステロ派のゲリラリーダー，マーシャル・コメ（Marcial Come）が米軍によって新しいラパス町長に任命された。[60)]

VII–2　戦後のアウステロ派による報復と対日協力問題

ところで，アウステロの下に戻ったミリタンテと前町長モロンはどのような運命をたどったのであろうか。10月18日，米軍の上陸が近づき，副町長モロンは家族とともに妻の実家があるラパス町内のルネタ村へ向かった。ルネタ村に着いて数日後，モロン副町長は，前町長で政敵のアウステロ並びにCICにより逮捕された。アウステロは，CICによる取り調べに先立ち，モロンの身柄を確保し，東レイテの有力ゲリラリーダー，アントニオ・シンコ少尉の下へ連行した。数日が経過しても，モロンの妻には何の知らせもなかった。戦後，妻はCICに対して夫であるモロンがシンコ少尉あるいはアウステロによって処刑されたと訴えた。[61)]

ミリタンテも同じような運命をたどった。ミリタンテは，戦後，コメ新町長の下で町役場の職員として再出発した。その頃，CICはブラックリストに載っていたミリタンテを国家反逆罪

60) Interview with Marcial Come, in Memorandum for the officer in charge, on 30 November 1944, Pedro K. Palaña PCP.

61) Interview with Virginia Toreno Molon (Molon's widow) in Memorandum for the officer in charge, on 30 November 1944, Pablo Molon PCP.

で起訴するため証拠収集に奔走していたが，1946年6月23日，そのミリタンテは何者かによって誘拐されてしまった。CICによる逮捕のわずか一日前であった。PCの記録によれば，翌24日，ミリタンテの遺体がラパス町内のとある川で発見された。[62]

ミリタンテは殺害された。一方でCICが戦後作成した調査報告書によれば，モロンは，モロンの妻が主張するようにアウステロ派のゲリラによって殺害されたという。[63] 彼らは何故殺害されたのか。その理由は今となっては知るすべもないが，前者はアウステロ派による犯行での殺害，そして後者は，おそらくはバキアノ処刑についてのアウステロ派による報復処置であろう。前述のように，1930年代からアウステロとモロンは政治抗争を繰り返してきた。その二人をめぐる政治抗争は，日本占領を経て，結局はアウステロ派のモロン派への報復という血なまぐさい結果に終わった。

一方，対日協力町長パラニャは，CICによって国家反逆罪のかどで逮捕された。CICによる証拠収集期間中，パラニャはタクロバンにあった対日協力者が収監されている収容所に拘禁された。CICは複数のラパス町関係者に面接調査し，その結果，パラニャの対日協力への動機は，反アウステロ派政治家の粛清にあったと結論付けた。ある証言者は，米軍がレイテに上陸後，「親米的」発言を行ったというパラニャを「日和見主義的な」人物であると強く非難した。パラニャは，CICの尋問において頑なに占領中の「親日的」態度を否定し，あくまで住民を駐留日本軍から守る目的で対日協力を行ったと主張した。しかし，前述したバキアノ少佐への殺害を否定することはできなかった。[64]

1945年10月，パラニャは，弁護人マリア・サルド・パレニョ（Maria Salud Parreño）が行った保釈申請が認められた後，保釈された。[65] 彼の国家反逆罪を審理する特別国民裁判の進行は遅れに遅れた。戦後5年ほど経った1950年3月，レイテ州バイバイ町第一予審裁判所特別検察官であったルイス・パナギトン（Luis Panaguiton）は，パラニャが関わった反米演説や食糧調達活動はロハス大統領による「政治的対日協力者への恩赦令」の適用対象であるとして，この部分の罪状についての起訴を取り下げる決定を行った。またゲリラ容疑者バキアノ少佐へのパラニャによる殺害の件については，当初の目撃証言者が前の証言内容を翻し，証拠不十分でこの件でもパラニャは不起訴になった。[66]

---

62) Police report executed by the chief of police of La Paz, on 25 June 1946 and affidavit of Estelita Militante, wife of Francisco Militante, on 4 December 1946, Francisco Militante PCP.
63) 前掲，Weekly CIC Report, 28 October–4 November 1944 of 7th CIC Detachment.
64) Memorandum for the Prosecution by Luis Panaguiton to Court of First Instances of Baybay, Leyte 13th Judicial District, on 5 March 1950, Pedro K. Palaña PCP.
65) Petition for bail by Attorney Ma. Salud V. Parreño to the People's Court, Manila, on 16 October 1945, Pedro K. Palaña PCP.
66) Memorandum for the Prosecution by Luis Panaguiton to Court of First Instances of Baybay, Leyte, on 5 March 1950, Pedro K. Palaña PCP.

米軍上陸後，米軍は記述のとおりマーシャル・コメを新市長に任命したが，何らかの理由で直ぐに更迭し，前ビベロス党に所属していたフランシスコ・マラテを新町長に任命した。[67] 翌1946年，町長選挙が行われ，元アウステロ派のゲリラ女戦士であり，マラテ町政の際，副町長であったジュリア・ルーメン（Julia Lumen）が町長に当選した［Lear 1952: ix］。戦後復興期のレイテにおいてレイテ史上最初の女性首長の登場であった。

VIII　戦後のレイテにおける「負」の記憶の消滅

以上考察した三つのレイテの町で起こった日本占領中の政治抗争劇は，何もレイテに限って起こったことではない。多かれ少なかれ，ほぼフィリピン全土の町村で発生した政治劇であったといっても過言ではない。日本占領下のフィリピンの地方における激しいエリート間抗争やフィリピン人どうしの残虐行為は，ポブレ［Pobre 1962］やロドリゲス［Rodriguez 1982］らのルソン島を事例とする研究でも議論されている。こうした抗日ゲリラ組織内部における政治抗争は，戦前からのエリート間の政治抗争を起因とするものであるが，本稿で示されたように，日本占領が抗争から派生した政治暴力を一層悪化させたと言ってもよいであろう。日本占領期においては，対日協力と称した「様子見」や「二重協力」は日常茶飯事であったであろう。しかし，その態様は必ずしも一様ではなかったことはここレイテの三つの町で発生した政治抗争劇を見ても明らかである。エリートたちは，自分たちの置かれた社会状況や自己の既得権益保持，並びに政治権力拡大といった政治的目標を念頭に置きつつ「対日協力」あるいは「対日抵抗」といった判断を行っていった。

第I章でも述べたように，レイテの各町々の町政は当時のヴェローソ・サラサール体制の影響下にあった。それは，町長のほとんどが国政においてナショナリスタ党の下で活動していたことを意味する。アメリカの政治学者カール・ランデ［Landé 1964: 2–3］もその著書で述べているように，フィリピンの政党は均一的なイデオロギーの観点からは党そのものの連帯は弱く，その一方で内部の派閥間の移籍移動が激しい政治集団であることを指摘している。またフィリピンの政治学者トーマスは，アメリカ植民地時代からのフィリピンの地方首長による行政権が，町民のための民主政治の拡充よりはむしろ自己の専制的な権力拡大のために行使されてきたことを指摘している［Thomas 1969: 427–429］。オルモックにおいても，アブヨグにおいても，そしてラパスにおいてもランデの指摘するような政治的共通理念を欠いた派閥同士の政治抗争が1930年代以降激しさを増し，この派閥抗争はそのまま抗日ゲリラ集団と対日協力集団との間の軋轢へとつながっていく。こうした日本占領下の政治抗争については，序章でも述

67）前掲，CIC Administrative Report, 7th CIC Detachment, 8 November 1944.

べた通り，マッコイもパナイ島での日本占領を事例に分析しているが，マッコイの主張は州レベルの派閥抗争が抗日ゲリラ集団の派閥抗争に反映されている，という点であろう。しかし，本稿でも明らかなように，日本占領下のレイテにおける町レベルの政治抗争は，必ずしもマッコイが主張するような州レベルの派閥抗争に沿って展開されていたわけではなく，またレイテにおける戦後の町レベルの政治状況も州レベルの政治状況によって形成されていたわけでもなかった。確かにヴェローソ・サラサール体制の下で，日本占領中，ヴェローソもサラサールも対日協力を行ったが，既存のレイテ各町47の町長らが取った対応は，すべてが「対日協力」ではなかった。この体制に組み込まれながらも日本占領中，抗日ゲリラ活動に身を投じたエリートらも多く，戦後再びこの体制に頼りながら自己の政治権力を復活させた者も多かった。[68)]

レイテではカンレオンとミランダという二つの有力な抗日ゲリラ勢力が，日本占領下の各町々で組織化された様々な抗日ゲリラ組織の政治的態度に大きく影響したと思われるが，個々のゲリラ組織にはカンレオンらの抗日戦線の理念とは異なるそれぞれ独自の闘争理念があり，完全な組織統一化を阻んだ。それぞれの抗日組織は，対日協力を行う町内の政治家たちと連携しつつも，その行動には町内の派閥力学が働いていた。その意味で彼らの政治行動は，当時の州レベルで対日協力を行ったヴェロソ・サラサール体制の政治理念や，または抗日ゲリラの統一化を目指したカンレオン大佐たちの理念とも一線を画すものであった。

結局は大義名分として「抗日」を闘争理念として掲げつつも，究極の目標はそれぞれの政治権力の拡張であったと言うことができる。複雑な町レベルの政治力学は，駐留日本軍をも巻き込む残虐行為や暴力の発生にまでつながった。レイテを戦場としか位置づけていない日本軍は，占領の後半に入り熾烈な討伐作戦で数多くのゲリラ嫌疑者を逮捕，拘禁した。逮捕された者の中には厳しい尋問と拷問の中で，または司令官じきじきによる斬首によって命を落とすものが増大した。ここで忘れてはいけないのは，こうした犠牲者の中に町内の派閥政治の中で翻弄された対日協力者またはゲリラのメンバーがいたことである。オルモック，アブヨグ，ラパスの例からもわかるように，各町内の派閥政治抗争の中でゲリラ嫌疑を口実に処刑あるいは殺害されたものの例は枚挙にいとまがない。興味深いことに，こうした派閥間の密告で逮捕，拘禁されたものへの処置について，各司令官は対日協力町長からの懇願（斬首刑など）によって決断をくだしていた。

ところで，マッコイの説に従って，レイテにおいても戦前からの寡頭政治体制は戦後も堅持されたといってもいいであろう。オルモックでも，アブヨグでも，ラパスでも，エリート階級

68) 筆者は，この点について，ここで議論された三つの町以外にも，パロンポン，ビリャバ，ナバル，ドゥラグ，ソゴド，アブヨグ，バイバイ，サンタフェ等の町における状況についても研究を進めている［Ara 2011］が，別稿の機会においてその内容を発表していきたいと考えている。

内部での政治権力移譲はあったにせよ，ドラスティックな社会変化は無かったといえる。問題は，カンレオンやミランダのような抗日ゲリラ同士の政治抗争や対日協力問題が戦後のレイテ社会にどのような影響を及ぼしたかであろう。二つの例を見てみよう。米軍の上陸後，対日協力者等を逮捕し，取り調べにあったCICの1944年後半から1945年前半にかけての駐留日誌には，戦時中のゲリラ集団が戦後依然として自己保全のための火器保持を強く主張し，CICが目論むような完全な火器没収が成功しなかったことが書かれている。[69] また，戦後の米軍による抗日ゲリラグループへの「バックペイ」取得に関連した「ゲリラ認証申請」（guerrilla recognition）が熾烈を極め［Constantino 1984: 154］，結局はカンレオングループのみが正式ゲリラグループとして認証されたことに対する他のゲリラ成員の政治的反目が高まった。

このように，火器没収とゲリラ認証という二つの例を考えても，戦後のレイテには政治的くすぶりが存在していた。特に前者の例は，戦後のフィリピンにおける政治的暴力の激化と関連する部分があるであろう。後者の例では，カンレオンという有力ゲリラリーダーを中心とする政治集団が戦後のレイテ政治を牛耳り，後に国防長官にまで登りつめるカンレオンに「バックペイ」獲得と自分たちの政治的復権を果たすため多くの元ゲリラリーダー（カンレオンが戦時中に指揮した元Leyte Area Commandのメンバー）たちがすり寄った。一方でそれと対立したミランダを中心とする集団が没落し，彼らは「ゲリラ認証」を得ることができなかった。[70]

戦後のレイテの政治状況でもう一つ特筆されるのは，オルモック，アブヨグ，ラパスそれぞれの町々で発生した対日協力問題がうやむやにされてしまったことである。対日協力問題がほとんど不問にされた一番大きな要因に，戦前からの寡頭政治がレイテ社会ひいてはフィリピン社会全体において戦後も継承される中で，こうした派閥政治の産物としての戦時中の有力な対日協力者たちが関与した残虐行為に対するフィリピン市民の曖昧な態度，そして「免罪」があったことは否定できない。それぞれ三つの町で発生した現地エリートらが関与したとされる残虐行為は，戦後まったくといっていいほど一般住民の脳裏から消え去ってしまった。ラパス町のパラニャ町長の関わった一件においても，特別国民裁判への起訴状に列挙してあったゲリラ嫌疑者への処刑罪状について，終戦直後の証言者のほとんどが手のひらを返すように以前の証言を否定してしまったことはまことに不可思議である。またもう一つの例として，多くの政敵殺害に関わり，不可解な経済的権益を蓄積させたとされるオルモックの故カタリノ・ヘルモシリャ町長に対してオルモック市議会は，1972年3月，同町長に対し，過去の「対日協力町長」

69) 300-CIC-2.2: Americal Division, G-2 Journal, 182nd Counter Intelligence Corps Detachment, Leyte（10 Jan–17 Feb 1945）国会図書館憲政資料室史料。マイクロフィッシュ史料（原所蔵機関：米国国立公文書館（RG407），請求番号WOR29346）。

70) 様々なレイテ島のゲリラグループが戦後の「ゲリラ認証」獲得をめざしたが，カンレオングループ以外そのほとんどの請求が却下されている。カンレオングループを中心とする「ゲリラ認証」をめぐる政治的な動きについては，今後の研究課題としたい。

の汚名から「名誉回復」を宣言する旨の決議を全会一致で可決した。[71)]

彼らの罪が曖昧にされ，年月とともに各町々での対日協力者問題は消えうせてしまった。「親米」であることがある意味で「美徳」とされてきた戦後のフィリピン社会において，「対日協力者」であったことは「恥」とされ，加えて過去の政敵殺害などの事実についてはタブー視されるに至った。[72)] こうしてレイテにおいては，フィリピン全体の親米感情の高まりと共にレイテ観光の目玉としてのマッカーサー率いる米軍のレイテ上陸の記憶だけが残存し，本稿で示されたようなアジア太平洋戦争についての「負」の記憶は，レイテ島民の脳裏から次第に薄らいでいったのである。

謝　辞

本研究は，2012年度福武学術文化振興財団歴史学研究助成による成果の一部である。刊行にあたり二人の匿名レフェリーの先生方に感謝する。本稿の一部は，2012年東南アジア学会関東例会と秋季研究大会（上智大学）にて発表された。報告に対しいくつかの有益なコメントを得ることができ，本稿の議論をかなりの程度整理することができた。中でも岡田泰平先生（成蹊大学）の的確なコメントに感謝する。

参　考　文　献

一次文献

防衛省防衛研究所図書館戦史史料（東京）

『第十六師団（垣）情報記録綴』昭和18年（1943年）12月，比島防衛49.

『第11独立守備隊比島討伐に関する書類その2』昭和18年（1943年）12月，比島防衛296.

国会図書館憲政資料室（東京）

300-CIC-2.2: Americal Division, G-2 Journal, 182nd Counter Intelligence Corps Detachment, Leyte (from 10 January 1945 to 17 February 1945)，マイクロフィッシュ史料（原所蔵機関：米国国立公文書館（RG407），請求番号WOR29346）.

University of the Philippines Main Library, Special Collections (University of the Philippines, Diliman, Quezon City, Philippines)

People's Court Papers (PCP)　特別国民裁判記録文書

Caña, Eleuterio Box No. 61-9　アブヨグ町町長

- Amended Information in the case of Eleuterio Caña, PCP, Criminal No. 224, on 20 November 1946.
- Court Decision in Spanish language, PCP Eleuterio Caña, Criminal No. 224, on 7 July 1947.

Collantes, Ricardo Box No. 74-11　アブヨグ町財務官兼副町長

- Affidavit executed by Marcial Costin, on 4 December 1944, and interview with Marcial Costin, on 26 January 1945 in Memorandum for the offices in charge, 224th CIC Detachment, APO225, on 31 January 1945.

71) "New Diversion Road Named after Ormocano," *The Reporter*, 24 March 1972. この決議では名誉回復と共に，オルモック市にある循環道路にCatalino Hermosilla Driveという命名がなされた。

72) フィリピンにおける対日協力者問題に対するフィリピン人の感情の変遷については，De Viana［2003: 151–190］が詳しい。

- Interview of CIC with Marcial Costin, a guerrilla intelligent, on 26 January 1945.
- Interview of CIC with Valeriano Tupa, Vice Mayor of Abuyog, on 23 February 1945.
- Interview with Attorney Bernardo Closa, Abuyog, on 8 December 1944 in Memorandum for the officer in charge, 224th CIC Detachment, APO 235, on 31 January 1945.
- Interview with Emeterio H. Palaña, municipal treasurer of Abuyog, on 23 February 1945.
- Resolution passed by the Civilian Volunteer Headleaders and Teniente del Barrio of Abuyog, Leyte, during their Joint Conference held on 13 November 1944.
- Ricardo Collantes to the Solicitor General, Manila, on 29 September 1946.
- Special Prosecutor Filemon Saavedra to the Solicitor General and Head, Office of Special Prosecutors, Manila (through Special Prosecutor Ignacio Debuque, Cebu City), Department of Justice, on 13 April 1948.
- Testimony of Catalino Landia in Transcript of Stenographic Notes in the Reinvestigation of Treason Case, on 2 December 1947.

Hermosilla, Catalino Box No. 146-10　オルモック町町長
- Affidavit of Enrique Omega to CIC, on 5 February 1945.
- Affidavit of Pelagio Codilla to CIC, on 7 February 1945.
- Affidavit of Rafael Omega to CIC, on 5 February 1945.
- Hermosilla to Governor Torres, December 1942.
- Interview of CIC with Vicente Tomada, on 15 February 1945.
- Paper clipping, *Leyte-Shimbun*, on 7 December 1942.
- Pedro Gonzalvez CIC interview, on 23 May 1945.
- Report of Lt. Bacalso to Philippine Army Ormoc, on 11 February 1945.

Militante, Francisco Box No. 198-4　ラパス町ゲリラ側スパイ兼対日協力者
- Affidavit of Esteba Aldaba, on 1 May 1944 and question-answer affidavit of Esteban Aldaba, on 6 July 1944.
- Guerrilla Mayor Bernardo Austero to US Army in La Paz, on 22 October 1944.
- Police report executed by the chief of police of La Paz, on 25 June 1946 and affidavit of Estelita Militante, wife of Francisco Militante, on 4 December 1946.

Molon, Pablo Box No. 199-12　ラパス町町長
- Interview with Virginia Toreno Molon (Molon's widow) in Memorandum for the officer in charge, on 30 November 1944.

Palaña, Pedro K. Box No. 213-16　ラパス町副町長兼財務官
- Interview of CIC with Apolinario Oriel, Justice of the Peace, La Paz, and Miss Julia Lumen, then a school-teacher of La Paz, on 5 November 1944.
- Interview of CIC with Roque Marcos and Vicente Marcos, Memorandum for the officer in charge, on 30 November 1944.
- Interview with Apolinario Oriel, Justice of the Peace, La Paz, and Miss Julia Lumen, on 5 November 1944.
- Interview with Marcial Come, in Memorandum for the officer in charge, on 30 November 1944.
- Memorandum for the Prosecution by Luis Panaguiton to Court of First Instances of Baybay, Leyte, 13th Judicial District, the People of the Philippines vs. Pedro Palaña, Criminal Case No. 811, on 5 March 1950.
- Petition for bail by Attorney Ma. Salud V. Parreño to the People's Court, Manila, on 16 October 1945.

Parilla, Alfredo Box No. 217-2　パロンポン町町長
CIC Report (Memorandum for the officer in charge), on 9 August 1945.

Salazar, Pastor　レイテ州対日協力側知事（現在閲覧不能）
- Interview with Antonio Benedicto, on 6 November 1944 in Memorandum for the officer in charge by 459th Counter Intelligence Corps of the US Army, on 8 November 1944.
- Salazar to Philippine Executive Commission, on 4 December 1942.

National Archives and Record Administration 2 (NARA2), College Park, Maryland, USA

- CIC Administrative Report, 7th CIC Detachment, 8 November 1944.
- CIC Area Study No. 3, Leyte Province, USAFFE-APO 501, 14 February 1945, Box 017, Entry 134A, RG319.
- Report of the Leyte Area Command, Guerrilla Recognition Files, Folder 17-1, Entry No. Philippine Archives Collection, Box 285, RG407.
- Report on the Western Leyte Guerrilla Warfare Forces and Various Information, 23 October 1944, Folder 17–14, Entry No. Philippine Archives Collection, Box 286, RG 407.
- Weekly CIC Report, 28 October–4 November 1944 of 7th CIC Detachment, CIDT-224-2.1, Entry 427, Box 14829, RG 407.

二次文献

Agoncillo, Teodoro. 1965. *The Fateful Years: Japanese Adventure in the Philippines, 1941–45*. Quezon City: RP Garcia Publishing Company.

荒　哲. 2006.「日本占領下フィリピン・レイテにおける食糧問題（1942年～1944年）」『国際政治』144: 32–50.

Ara, Satoshi. 2008. Food Supply Problem in Leyte, Philippines, during the Japanese Occupation (1942–1944). *Journal of Southeast Asian Studies* 39(1): 59–82.

————. 2011. A Study of the Japanese Occupation of Leyte, Philippines (1942–1945). In *Filipino Colonial History and Legacy: Centennial Publication of De La Salle University-Manila*, edited by Ferdinand Dagamang, pp. 119–150. Manila: Central Books.

————. 2012. Collaboration and Resistance: Catalino Hermosilla and the Japanese Occupation of Ormoc, Leyte (1942–1945). *Philippine Studies* 60(1): 33–68.

Arens, Richard SVD. 1977. The Early Pulahan Movement in Samar. *Leyte-Samar Studies* 11(2): 57–113.

Baclagon, Uldarico. 1952. *Philippine Campaigns*. Manila: Graphic House.

————. 1962. *They Chose to Fight*. Quezon City: Capitol Publishing House, Inc.

————. 1966. *The Philippine Resistance Movement against Japan*. Manila: Veterans Federation of the Philippines.

Benda, Harry J. 1958. *The Crescent and Rising Sun: Indonesia under the Japanese Occupation 1942–45*. The Hague: Van Hoeve Ltd.

防衛庁防衛研修所戦史室. 1966.『比島攻略作戦』（戦史叢書）朝雲新聞社.

Borrinaga, George E. 2007. The Pulahan Movement in Leyte (1902–1907). Paper for presentation at the Philippine National Historical Society's 28th National Conference on Local and National History, Tangub City, Misamis Occidental, 29 November–1 December.

————. 2010. Human Bibingka: Leyteño under the Japanese Rule. *Journal of History* (The Philippine National Historical Society) 56: 214–241.

Borrinaga, Rolando. 1995. Editor's Introduction in Ken-nosuke Nakajima, Sunset in Biliran-Part I, *Bankaw News* 7 June 1995.

————. 2003. *The Balangiga Conflict Revised*. Quezon City: New Day Publishers.

————. 2006. *The Colonial Odyssey of Leyte* (Reseña de la Provincia de Leyte por Manuel Artigas y Cuerva). Quezon City: New Day Publishers.

————. 2008. *Leyte-Samar Shadow*. Quezon City: New Day Publishers.

————. 2012. Personal Translation of *Reseña de la Provincia de Leyte*, authored by Manuel Artigas y Cuerva, 1914, pp. 253–264. Manila: Imprenta Cultura Filipinas.

Caluen, Ricardo Jorge S. 1984. Iligan Collaborators Recall the Occupation Years. *Proceedings of the Fifth National Conference on Local History*, pp. 31–42. Iligan City: The Coordination Center for Research and Development.

Chaput, Donald. 1977. Ruperto K. Kangleon. *Leyte-Samar Studies* 11(1): 12–20.

Chung, Joaquin G. Jr. 1989. *For Love of Country: Saga of Ruperto K. Kangleon and the Leyte Guerrillas*. Manila: Integrated Publishing House.

Constantino, Renato. 1984. *The Philippines: The Continuing Past*. Quezon City: The Foundation for Nationalist Studies.

Cortes, Rosario. 1990. *Pangasinan, 1901–1986: A Political, Socioeconomic, and Cultural History*. Quezon City: New Day Publishers.

De Viana, Augusto. 2003. *Kulaboretor!: The Issue of Political Collaboration during World War II*. Manila: University of Santo Tomas Publishing House.

Doromal, Jose M. 1952. *The War in Panay: A Documentary History of the Resistance Movement in Panay during World War II*. Manila: The Diamond Historical Publications.

Haggerty, Edward. 1964. *Guerrilla Padre in Mindanao*. Manila: Bookmark.

Harkins, Philip. 1955. *Blackburn's Headhunters*. New York: W.W. Norton and Co., Inc.

Hofileña, Josefina D. 1990. Wartime in Negros Occidental, 1942–45. MA thesis, CSSP, University of the Philippines.

川島　緑. 1996.「『モロ族』統治とムスリム社会の亀裂――ラナオ州を中心に」『日本占領下のフィリピン』池端雪浦（編），103–144 ページ所収．東京：岩波書店.

Kawashima, Midori. 1999. Japanese Administrative Policy towards the Moros in Lanao. In *The Philippines under Japan: Occupation Policy and Reaction,* edited by Setsuho Ikehata and Ricardo Trota Jose, pp. 99–126. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

Kerkvliet, Benedict. 1977. *The Huk Rebellion*. New York: Columbia University Press.

Landé, Carl H. 1964. *Leaders, Factions, and Parties: The Structure of Philippine Politics*. New Heaven: Yale University.

Lear, Elmer. 1951. Collaboration, Resistance, and Liberation: A Study of Society and Education in Leyte, Philippines, under Japanese Occupation. Ph.D. dissertation, Columbia University.

————. 1952. Collaboration in Leyte: The Philippines, under Japanese Occupation. *The Far Eastern Quarterly* 11(2): 183–206.

————. 1961. *The Japanese Occupation in the Philippines, Leyte: 1941–45*. Ithaca, New York: Southeast Asia Program, Department of Far Eastern Studies, Cornell University.

————. 1978a. Agriculture and Food during Leyte's Liberation. *Leyte-Samar Studies* 12(2): 332–340.

————. 1978b. Education in Liberated Leyte. *Leyte-Samar Studies* 13(2): 324–331.

————. 1978c. Leyte's Civilians in a Time of Transition. *Leyte-Samar Studies* 12(2): 57–61.

————. 1978d. Leyte's Collaborationists: Their Fate. *Leyte-Samar Studies* 12(2): 154–168.

McCoy, Alfred. 1980. Politics by Other Means: World War II in the Western Visayas. In *Southeast Asia under Japanese Occupation*, edited by Alfred McCoy, pp. 158–203. New Heaven: Yale University Southeast Asia Studies.

————, ed. 1993. *An Anarchy of Families: State and Family in the Philippines*. Madison: University of Wisconsin Press.

Mojica, Proculo L. 1965. *Terry's Hunters*. Manila: Benipayo Press.

大岡昇平. 1980.『レイテ戦記』17 版．東京：中央公論.

Ormoc City Government. City History. www.ormoc.gov.ph　2010 年 3 月 26 日アクセス.

Pedrola, Tomas. 1949. Education in Panay during the Japanese Regime. MA thesis, Sagrado Corazon de Jesus.

Philippines, Commission of the Census. 1940. *Census of the Philippines: 1939*. Manila: Bureau of Printing.

Pobre, Cesar P. 1962. The Resistance Movement in Northern Luzon (1942–45). MA thesis, University of the Philippines.

Proceedings of the Fifth National Conference on Local History. 1984. Iligan City: Coordination Center for Research and Development.

Quetschenback, Raymond. 1977. Bernardo Torres: Governor of Leyte under the Japanese. *Leyte-Samar Studies* 11(2): 1–7.

Rodriguez, Ernesto R. 1982. *The Bad Guerrillas of Northern Luzon*. Quezon City: J. Burgos Media Services.

Steinberg, David Joel. 1967. *Philippine Collaboration in World War II*. Ann Arbor: University of Michigan.

Tantuico, Francisco S. Jr. 1964. *Leyte: The Historic Islands*. Tacloban: The Leyte Publishing Corporation.

寺見元恵. 1994.「日本のフィリピン占領に関する研究の成果と動向」『東南アジア――歴史と文化』23: 96–112.

Thomas, Ladd M. 1969. Centralism in the Philippines: Past and Present Cause. In *Foundation and Dynamics of Filipino Government,* edited by Jose V. Abueva and Raul P. De Guzman, pp. 427–429. Manila: Bookmark.

Volckmann, Russell W. 1954. *Three Tears behind the Enemy Lines in the Philippine*. New York: W. W. Norton and Co., Inc.

新聞記事
"Mayor Election Results," *Tribune*, 14 December 1940, p. 11.
"New Diversion Road Named after Ormocano," *The Reporter*, 24 March 1972.
"To Create District, Neighborhood Associations," *Leyte Shimbun*, 26 September 1942.

インタビュー
リカルド・コリャンテスの孫（匿名）へのインタビュー．1995年5月末頃．フィリピン，レイテ，アブヨグにて．
ホセ・ヴェローソの孫娘（匿名）へのインタビュー．1996年3月1日．フィリピン，ケソン市マギンハワ通りにて．

書簡及び電子メール
故ヘルモシリャ町長の孫マリオ・ヘルモシリャ（Mario Larrazabal Hermosilla）から筆者への電子メール．2006年5月1日．現在，アメリカ，カリフォルニア州在住．
故ヘルモシリャ町長の息子，ホセ・ヘルモシリャ（Jose Larrazabal Hermosilla）から筆者への書簡．2006年11月10日．現在，アメリカ，カリフォルニア州在住．
エミール・ジュスティンバステ（Emil Justimbaste）から筆者への電子メール．2011年11月30日．

映画作品
Oro, Plata, Mata（金，銀，屍）．1982．ペケ・ガリャガ（Peque Gallaga）監督．フィリピン映画．

テレビ作品
「NHKスペシャル　死者たちの声，大岡昇平『レイテ戦記』」1995年8月14日放送．

（2013年2月7日　掲載決定）